

東京国立文化財研究所要覧 : 1974

出版年月日	1975-08-28
URL	http://doi.org/10.18953/00008571

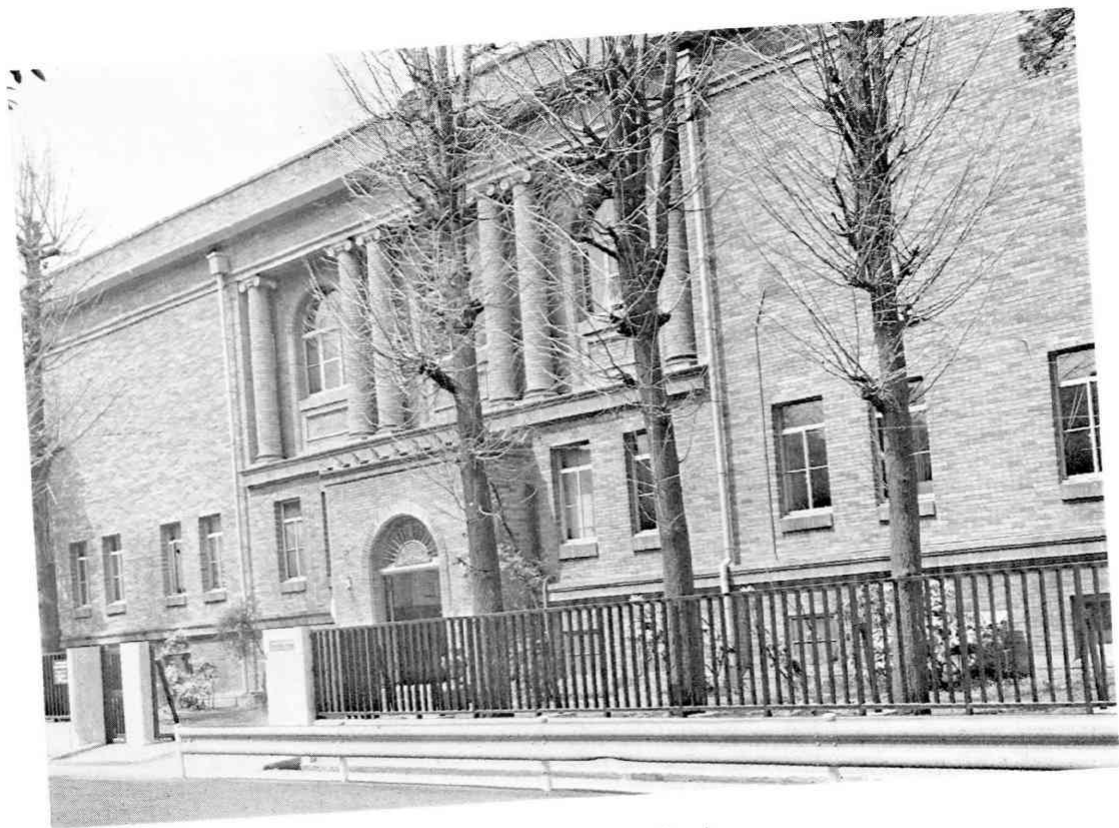


東京国立文化財研究所要覧

1 9 7 4

昭和 49 年 度





美術部庁舎

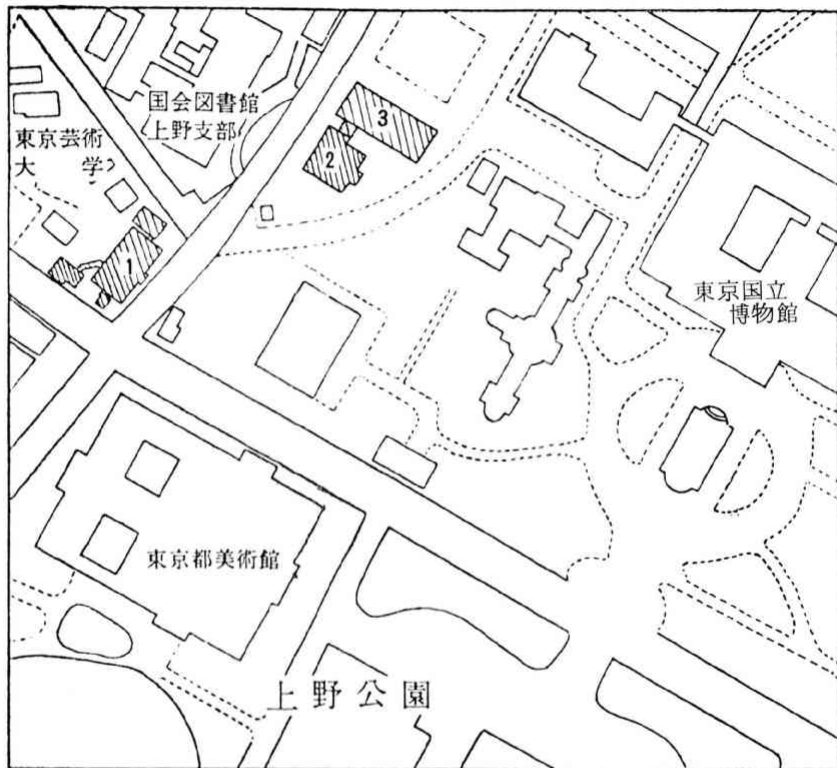


芸能部・保存科学部・修復技術部庁舎



庶務課・保存科学部庁舎

東京国立文化財研究所建物所在図



1. 美術部庁舎
2. 庶務課・保存科学部庁舎
3. 芸能部・保存科学部・修復技術部庁舎

目 次

I 沿 革	1
1 設 立 の 経 緯	1
2 年 表	1
3 歴 代 所 長	5
II 設立目的と機構	6
1 機 構	6
2 職種別予算定員	7
III 土地・建物	8
1 建物の面積・構造一覧	8
2 建物の平面図	9
IV 予 算	13
1 歳 出 予 算	13
2 科学研究費補助金交付決定額	13
V 研究活動及び事業	14
1 研 究 活 動	14
(1) 美 術 部	14
A 概 要	14
B 研究題目及び調査活動	15
イ. 一 般 研 究	15
ロ. 特 別 研 究	22
ハ. 科学研究費	23
C 主要研究業績	24

(2) 芸 能 部	28
A 概 要	28
B 研究題目及び調査活動	30
イ. 一般研究	30
ロ. 特別研究	33
C 主要研究業績	34
(3) 保存科学部	35
A 概 要	35
B 研究題目及び調査活動	37
イ. 一般研究	37
ロ. 特別研究	46
ハ. 受託研究	46
ニ. 科学研究費	48
ホ. 在外研究員	49
C 主要研究業績	49
(4) 修復技術部	52
A 概 要	52
B 研究題目及び調査活動	54
イ. 一般研究	54
ロ. 特別研究	59
ハ. 受託研究	60
ニ. 科学研究費	61
C 主要研究業績	62
2 事 業	63
(1) 出 版	63
A 美術研究	63
B 明治美術資料集成	65
C 保存科学	66
D その他の出版物	67

(2) 公開學術講座	69
(3) 開所記念日行事	71
(4) 会 議	72
(5) 国際国内関係	73
VI 研究施設・設備	75
1 藏 書	75
2 資 料	75
3 機 器・設 備	76
4 黒田記念室	80
5 閱 覧 室	81
VII 職 員	82
1 現 職 員	82
2 旧 職 員	84
VIII 関係法規	88

I 沿 革

1 設立の経緯

本研究所は、昭和27年4月1日発足したのであるが、その前身であり母胎となったものは、昭和5年に創設された帝国美術院附属美術研究所である。

この美術研究所は、大正13年7月、故帝国美術院長子爵黒田清輝の遺言により美術奨励事業のために出捐した資金で遺言執行人が選択決定した事業である。すなわち遺言執行人代表伯爵樺山愛輔は、故子爵の遺志にしたがってこの資金で行なうべき事業の選定を伯爵牧野伸顕に一任した。牧野伯爵は帝国美術院長福原鏖二郎および東京美術学校長正木直彦とはかって諸方面の意見を徴し、またわが国美術上の必要に照らして次の事業を行なうこととした。

- (1) 美術に関する基礎的調査研究機関として美術研究所を設けること。
- (2) 黒田子爵の作品を陳列して同子爵の功績を記念すること。
- (3) 前二項の目的を達するために適当な建物を造営すること。
- (4) 事業成立のうへは一切これを政府に寄附すること。

2 年 表

昭和元年12月 前記の事業を遂行するため委員会が設置され、東京美術学校長正木直彦が委員長に就任し、美術研究所事業について東京美術学校教授矢代幸雄、黒田子爵作品陳列について東京美術学校教授久米桂一郎・岡田三郎助・同和田英作・同藤島武二および大給近清、建築造営について東京美術学校教授岡田信一郎、会計事務について遺言執行人打田伝吉を各委員として事務を分掌進行させた。

昭和2年2月 美術研究所準備事業を開始した。

同年10月 東京市上野公園内に鉄筋コンクリート造、半地階2階建、延面積1.192㎡の建物1棟を起工した。

同3年9月 前記の建物が竣工したので、美術研究所開設のため必要な備品・図書・

写真等の研究資料を設備し、また館内に黒田子爵記念室を設け、同子爵の作品を陳列した。

同 4 年 5 月 遺言執行人代表者樺山愛輔は、建物・設備・研究資料等一切の外に金15万円をそえて帝国美術院長に寄附を願い出た。

同 5 年 6 月 28 日 勅令 第125号により 帝国美術院に附属美術研究所が置かれ、東京美術学校校長正木直彦が同研究所の主事に補せられた。

同年10月17日 美術研究所開所式を挙行了た。

同 7 年 1 月 美術研究所の研究成果発表機関誌として、定期刊行物「美術研究」を創刊した。

同年 4 月 18 日 株式会社朝日新聞社より明治大正美術史編纂費として本年から向う 5 ヶ年間毎年 5 千円、合計 2 万 5 千円を帝国美術院に寄附したいと 申出があった。

同年 5 月 26 日 帝国美術院はこの申出を受理した。

明治大正美術史編纂委員会規程を設け、美術研究所は明治大正美術史の編纂に関する事務を行なうことになった。

同 9 年 10 月 18 日 毎年10月18日を開所記念日と定めた。

同10年 1 月 28 日 鉄筋コンクリート造、2 階建、延面積129㎡の書庫が竣工した。

同年 4 月 「日本美術年鑑」の編纂事務を開始した。

同年 6 月 1 日 勅令第148号により美術研究所官制が公布された。

研究資料閲覧規程を制定し、閲覧事務を開始した。

同12年 6 月 24 日 勅令 第281号により 美術研究所官制中改正の件が公布され、従来、帝国美術院に附置されていたのを文部大臣の直轄に改められた。

同年11月29日 美術研究所長職務規程、美術研究所事務分掌規程が制定された。

同13年 2 月 12 日 木造、平家建、延面積97㎡の写真室 1 棟が竣工した。

同19年 8 月 10 日 黒田清輝の作品、ならびに写真原版を東京都西多摩郡小宮村谷間家倉庫に疎開した。

同20年 5 月 28 日 美術研究所の図書・諸資料全部を山形県酒田市本町 1 丁目本間家倉庫 3 棟に疎開した。

同年 7 月～8 月 酒田市本間家倉庫に疎開した図書資料を爆撃の危険を避けるため、さらに酒田市外牧曽根村松沢世喜雄家倉庫・観音寺村村上家倉庫・大沢村後藤作之

巫家倉庫にそれぞれ分散疎開した。

同21年 3月29日 酒田市疎開中の図書・諸資料等の東京向け発送を終了した。

同年 4月4日 酒田市疎開中の図書・諸資料等が東京に到着し引揚げを完了した。

同年 4月16日 東京都西多摩郡小宮村谷間家倉庫に疎開中であった黒田清輝作品ならびに写真原版の引揚げを完了した。

同22年 5月3日 美術研究所官制が廃止され、国立博物館官制が制定された。美術研究所は同館の附属美術研究所となった。

同24年 本年度から科学研究費により光学的方法による美術品の鑑識に関する研究が開始された。

同25年 8月29日 文化財保護法の制定に伴い、美術研究所は文化財保護委員会の附属機関となった。

同26年 1月31日 美術研究所組織規程（昭和26年文化財保護委員会規則第5号）が定められ第一研究部・第二研究部・資料部・庶務室が置かれた。（昭和25年 8月29日から適用）

同27年 4月1日 東京文化財研究所組織規程（昭和27年文化財保護委員会規則第4号）が定められ、美術部・芸能部・保存科学部・庶務室の3部1室が置かれ、美術研究所組織規程が廃止された。

同年 7月1日 芸能部研究室として東京芸術大学音楽学部邦楽科教室2室を同大学から借用し、研究を開始した。

同28年 4月26日 保存科学部研究室は、国立博物館保存修理課保存技術研究室として昭和22年発足以来、東京国立博物館地階の1室に置かれていたが、同館構内の倉庫132㎡を改造のうえ移転した。

同29年 7月1日 東京文化財研究所組織規程の一部が改正され（昭和29年文化財保護委員会規則第1号）、東京国立文化財研究所となった。

同32年 3月28日 東京国立博物館構内に木造、外部鉄網モルタル塗、平家建、8㎡の保存科学部の薬品庫が竣工した。

同年11月30日 従来の2階建書庫のうえに更に1階を増築3階建とし、増築分延面積71㎡が竣工した。

同34年 4月30日 国立文化財研究所研究受託規程（文化財保護委員会告示第14号）が

定められ、この年度から受託研究が開始された。

同36年 9月16日 東京国立文化財研究所組織規程の一部が改正され（昭和36年文化財保護委員会規則第1号）、従来の庶務室は庶務課となった。

同37年 3月31日 東京国立博物館構内に保存科学部庁舎として、鉄筋コンクリート造 2階建延面積663 m^2 の建物1棟が竣工した。

同年 7月1日 東京国立文化財研究所組織規程の一部が改正され（昭和37年文化財保護委員会規則第1号）、新たに保存科学部に修理技術研究室が置かれた。

同年 7月20日 芸能部研究室は、保存科学部庁舎の竣工に伴い、旧保存科学部庁舎に移転した。

同43年 6月15日 文部省設置法の一部が改正され（昭和43年法律第99号）、本研究所は文化庁附属機関となった。

同44年 8月23日 保存科学部庁舎に隣接して新営される別館庁舎（延1950.41 m^2 ）の起工式が行なわれた。

同45年 3月25日 前記の別館が竣工したので、同年5月26日竣工式が行なわれた。

同45年 4月22日 芸能部は、別館3階に移転した。

同45年 5月8日 保存科学部は、別館の地階～2階に実験用機械類の移転据付を終った。

同45年 6月29日 保存科学部庁舎の1階の模様替工事に着手し、同年10月15日工事が終了した。

同年11月2日 所長および庶務課は、本館から保存科学部庁舎の1階に移転した。

（本館は、美術部庁舎となる。）したがって研究所の所在地表示は「12番53号」を「13番27号」と変更された。

同46年 4月1日 保存科学部庁舎および別館の敷地2,658 m^2 を東京国立博物館から所属換された。

同48年 4月12日 文部省設置法施行規則の一部が改正され（昭和28年1月13日文部省令第2号）新たに修復技術部が設けられ4部1課となり、修復技術部に第一修復技術研究室及び第二修復技術研究室が置かれた。ただし保存科学部の修理技術研究室は廃止された。

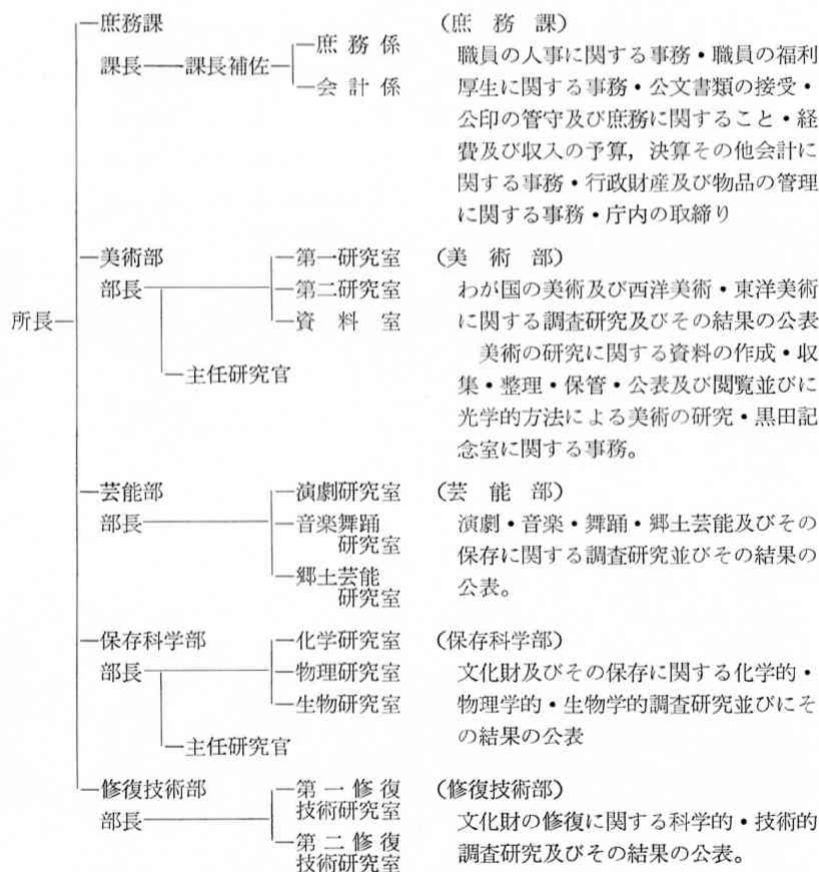
3 歴代所長 (昭和5年～昭和48年)

主 事	正 木 直 彦	(昭和 5. 6.28～昭和 6.11.25)
主 事	矢 代 幸 雄	(昭和 6.11.25～昭和10. 6. 1)
所長事務取扱	和 田 英 作	(昭和10. 6. 1～昭和11. 6.22)
所 長	矢 代 幸 雄	(昭和11. 6.22～昭和17. 6.29)
所長事務取扱	田 中 豊 藏	(昭和17. 6.29～昭和22. 8.16)
所 長	田 中 豊 藏	(昭和22. 8.16～昭和23. 5.11)
所 長 代 理	福 山 敏 男	(昭和23. 5.11～昭和24. 8.31)
所 長	松 本 栄 一	(昭和24. 8.31～昭和27. 4. 1)
所長事務代理	矢 代 幸 雄	(昭和27. 4. 1～昭和28.11. 1)
所 長	田 中 一 松	(昭和28.11. 1～昭和40. 4. 1)
所 長	関 野 克	(昭和40. 4. 1～ 現 在)

Ⅱ 設立目的と機構

東京国立文化財研究所は、文化財に関する調査研究、資料の作成及びその公表を行なうことを目的として設立された文化庁の附属機関である。その機構等は次のとおりである。

1 機 構



2 職種別予算定員

区 分	4 8 年 度	4 9 年 度
指 定 職	1	1
所 長	1	1
行 政 職 (一)	1 3	1 3
課 長	1	1
課 長 補 佐	1	1
係 長	2	2
専 門 職	3	3
主 任	1	1
一 般 職 員	5	5
行 政 職 (二)	0	0
技能・労務職員	0	0
研 究 職	3 4	3 4
部長等研究員	1 0	1 0
室長等研究員	1 2	1 2
研 究 員	1 2	1 2
合 計	4 8	4 8

Ⅲ 土地・建物

本研究の主な建物は、東京都台東区上野公園12番53号所在の本館と、上野公園13番27号所在の保存科学部実験室および別館である。

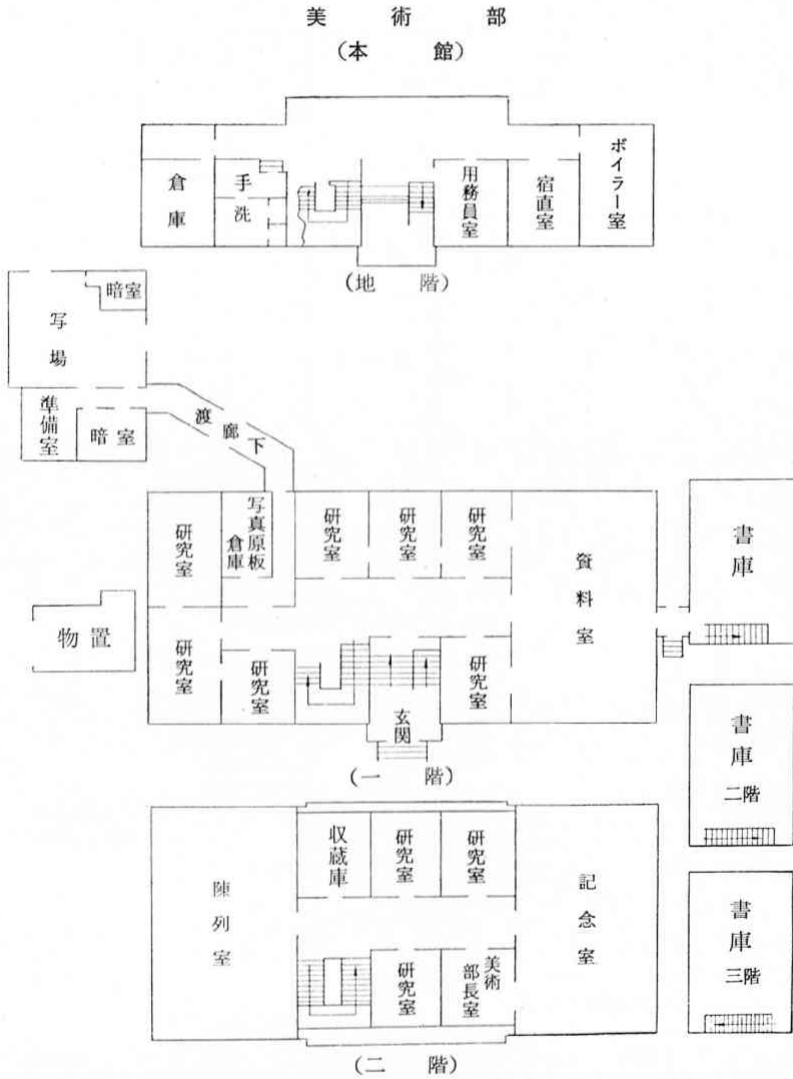
土地は、本館の敷地1,457 m^2 保存科学部実験室および別館の敷地2,658 m^2 の計4,115 m^2 である。

なお、建物の面積・構造等は、次のとおりである。

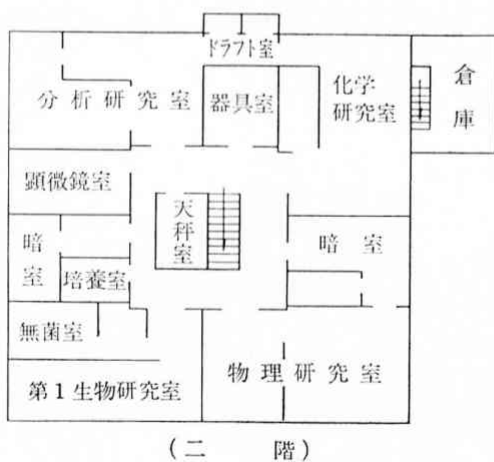
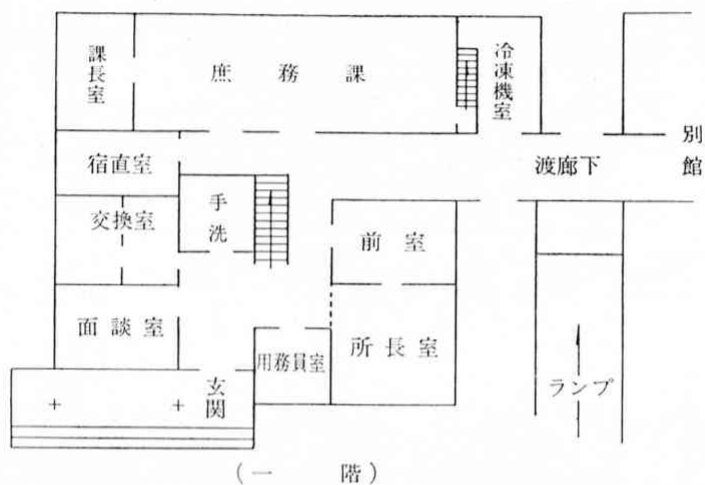
1 建物の面積・構造一覧

No	名 称	種目・構造	建面積 延面積	建 年 月 日	No	名 称	種目・構造	建面積 延面積	建 年 月 日
1	本 館	事務所建 RC.地上 2階・地下 1階	$\frac{468.26}{1,192.72}m^2$	昭 3. 8. 30	6	渡 廊 下 (写場)	雑 屋 建 木造平家	$\frac{20.26}{20.26}m^2$	昭 13. 3. 25
2	書 庫	倉 庫 建 RC. 3階	$\frac{64.63}{201.80}$	〃 10. 1. 25 (32. 11. 30) (3階増築)	7	車 庫 (現物置)	〃	$\frac{27.96}{27.96}$	〃 15. 9. 11
3	渡廊下 (書庫)	雑 屋 建 RC. 平家	$\frac{4.90}{4.90}$	〃 10. 1. 25	8	保存科学 部実験室	事務所建 RC. 2階	$\frac{338.44}{684.91}$	〃 37. 3. 28
4	写 場 及 第 1 暗室	雑 屋 建 木造平家	$\frac{62.80}{62.80}$	〃 13. 1. 8	9	別 館	事務所建 RC. 地下 1階地上3 階塔屋付	$\frac{462.75}{1,950.41}$	〃 45. 3. 25
5	準備室及 第 2 暗室	〃	$\frac{35.12}{35.12}$	〃	10	渡 廊 下 (別館)	雑 屋 建 鉄 骨 平 造 家	$\frac{27.60}{27.60}$	〃

2 建物の平面図 (各庁舎の縮尺不同)

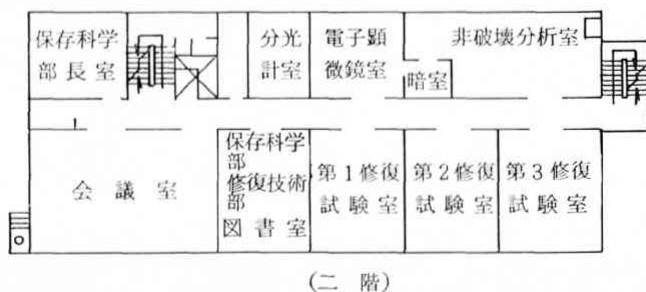
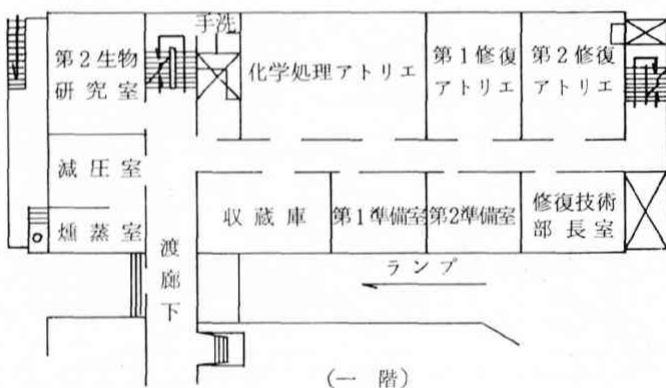
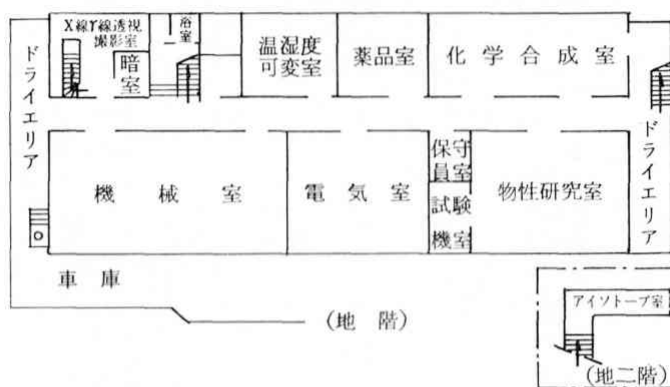


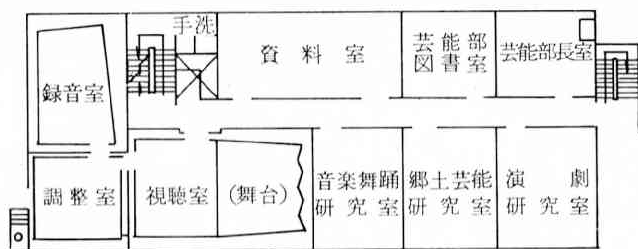
庶務課・保存科学部(実験室)



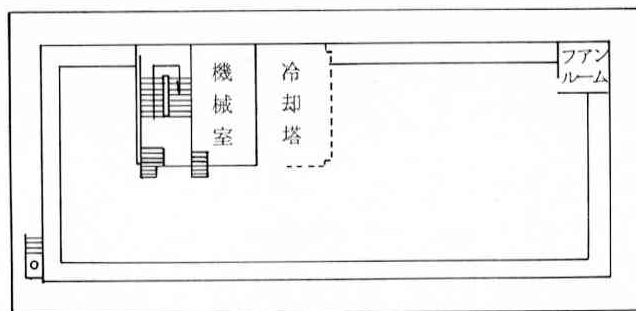
芸能部・保存科学部・修復技術部

(別 館)





(三 階)



(屋 上)

Ⅳ 予 算

1. 予算（当初）

（単位千円）

区 分	人 件 費	事 業 費	施設整備費	合 計
昭和48年度	103,150	57,760	0	160,910
昭和49年度	145,790	64,490	0	210,280

2. 科学研究費補助金交付決定額

（単位千円）

区 分	一般研究		奨励研究		総合研究		合 計	
	件数	金 額	件数	金 額	件数	金 額	件数	金 額
昭和48年度	5	4,530	2	340	1	1,500	8	6,370
昭和49年度	4	2,790	0	0	1	2,300	5	5,090

昭和49年度内訳

研 究 題 目	研究代表者・ 担 当 者	金 額 千円	摘 要
院政前期より後期への様式展開に関する研究	猪 川 和 子	2,300	総合研究A
古美術品修復技法の資料蒐集とその基礎的研究	西 川 杏太郎	1,200	一般研究C
遺物の埋蔵及び保存環境における変壊現象に関する研究	江 本 義 理	1,000	〃
1930年代中国絵画の研究	鶴 田 武 良	260	一般研究D
発掘時における漆芸品の保存処置の研究	見 城 敏 子	330	〃

V 研究活動及び事業

1 研究活動

(1) 美術部

A 概要

美術部は日本・東洋の古美術、日本の近代・現代美術とこれらに関連のある西洋美術についての基礎的調査と専門的研究を行ない、その成果を公表するとともに、美術に関する研究資料を作成、収集、整理し、これらの資料を一般研究者の利用にも供し、美術史学研究における資料センターの役割も果している。現在3室に分かれ、古美術関係は第一研究室、近代・現代・西洋美術は第二研究室、資料関係は資料室が担当する。

調査研究は美術部3室所属研究員の専門領域を中心として実証的に進められているが、学界現下の動向を把握するとともに将来の趨勢を洞察し、方法においても成果においても、基礎的・先駆的役割を果して、広く永く学界に寄与すべく努めている。そのため重要な問題に関しては共同研究を行い、また当部独自の光学的研究法を活用し、すでに多くの成果を取めている。

これらの業績は当部の機関誌「美術研究」(昭和7年創刊、年6冊発行)に発表し、大部の成果は随時単行の研究報告書として刊行している。また毎年のわが国美術界全般にわたる動向を調査し、客観的資料の提供を主眼とした「日本美術年鑑」を編纂発行している。

研究資料の収集・作成などに関しては、当部の前身たる美術研究所として発足以来調査研究とともに力をそそいで来たが、毎年増大する資料の蓄積は、文化財関係事業等のためのみならず、部外研究者や、広く海外の研究者のためにも大きな寄与を果している。また「日本美術年鑑」には、毎年日本・東洋古美術ならびに近代・現代・西洋美術に関する雑誌論文および単行図書を分類集録した文献目録を編纂し、美術史学界をはじめ関連ある学界に著しく貢献している。なお古美術関係文献についてはさらに増補訂正を加え一定の年次をまとめて既に数冊刊行したが、今後もこれが継承に努めたい。

V 研究活動及び事業

以上のほか、調査研究成果の一部を広く一般の理解に資するため、毎年1回公開学術講座を開催している。

黒田清輝の遺産と遺作の寄附に基いて創立された、美術部（旧美術研究所）の黒田記念室は、黒田の作品その他関係資料を保管し、毎週一回、一般に公開している。

第一研究室・資料室

第一研究室、資料室の研究員は、日本、中国、中央アジア等、各々専門とする領域を中心に調査研究を進め、主要問題を捉え共同研究を行い、また常に精密な基礎資料の収集に努めている。

今年度より芸能部と共同の特別研究「浄土教関係の文化財に関する総合研究」（49～52年度4か年計画初年度、第一研究室長他11名）の中で、絵画、彫刻、書蹟、工芸の造型部門を担当、研究活動を行なった。

文部省科学研究費による共同研究としては、昭和48年度に続いて「院政前期より後期への様式展開に関する研究」（総合A・代表者猪川主任研究官他7名）に関して各分野の研究者と交流、研究会を行なった。また同科学研究費による「1930年代中国絵画の研究」（一般D・鶴田武良）についても、公開学術講座等にその研究の一部を発表した。

第二研究室

第二研究室においては、近代美術史の調査研究、現代美術の動向調査を行なったが、特に現代美術の動向調査については集積した年度資料を「日本美術年鑑」49年度版に発表を予定していたところ、出版費不足のため残念ながら発刊を見送ることとなった。また、今年度は特別研究「日本近代美術の発達に関する明治前・中期の基礎資料の調査研究」をまとめ、「明治美術基礎資料集」刊行のはこびとなった。

B 研究題目及び調査活動

<Ⅰ. 一般研究>

岡 畏三郎（美術部長）

〔Ⅰ〕 日本近代絵画史の研究

明治末より大正期へかけての新絵画運動について異画会、草土社、院展洋画

部などを主に、作品並びに資料の収集整理を継続。当時刊行の諸資料のほか、作家及び遺族を訪ねての聞き書、或は所蔵資料の調査により記録収集につとめた。

〔Ⅱ〕 現代美術の動向についての調査研究

都内における展覧会の調査を主として行っている。

〔Ⅲ〕 日本版画史の研究

江戸後期浮世絵研究のほか、創作版画運動の足跡を示す版画作品が現代ほとんど散失しているので、作品の所在調査を続けている。

久野 健（第一研究室長）

〔Ⅰ〕 日本古代彫刻史の研究

7、8世紀の古彫刻の調査としては、本年度は東京国立博物館蔵の菩薩形木彫をはじめ、奈良滝寺の磨崖石仏等の調査を行い、当時の磚仏及び押出仏との関連を調べた。また大分長谷寺の銅造観音像を精査しその結果を美術研究に発表した。さらに、宇佐市天福寺奥院に8世紀まで遡り得ると考えられる塑造を三軀発見し、同寺の多数の木彫群と共に調査を行い、その他、新潟県能生市の古彫刻及び沼津市の仏像等を調査し成果を得た。

〔Ⅱ〕 中世の仏師の研究

本年度は従来研究を続けてきた運慶の彫刻をまとめるため、京都六波羅蜜寺・静岡県願成就院、神奈川浄楽寺の諸像の再調査を行い「運慶の彫刻」として刊行した。

〔Ⅲ〕 光学的方法による古彫刻の研究

本年度は、主として誕生仏及び押出仏に対する種々の光学的方法による調査を行い、伝世品と出土品との違いを検出し、鍍金の有無等を調べた。

田村 悦子（主任研究官）

〔Ⅰ〕 和漢の書道及び書道史の研究

一平安朝書道史の再吟味の為の遺品の検討・確定一

いわゆる三筆から三蹟への推移が日本書道史上の最も重大な転換の一つであ

V 研究活動及び事業

るが、それが、どのような現象であるかを厳密に知る為には関係遺品について真偽よりはじめ年代作者等を確定することが先決である。この目的のため三蹟の一人藤原行成の遺品について調査した結果、新たに御物（宮内庁蔵）行成筆敦康親王初親関係文書を見出し、それが行成真蹟であることを論証すると共に、行成筆蹟の認定は如何なる遺品を出発点としてすゝめるべきかを論考した。

〔II〕 異体字の歴史的研究

年来、継続進行してきた異体字用例の摘出を配列・整理する作業をすゝめると共に、なお補足すべき材料を追加している。

柳沢 孝（主任研究官）

〔I〕 日本仏教絵画史の研究

- (1) 飛鳥・白鳳時代の玉虫厨子絵・橘夫人厨子絵・法隆寺金堂焼損壁画の調査と研究
- (2) 平安後期密教絵画、特に米振寺及び東寺五大尊の調査と研究
- (3) 廃寺永久寺真言堂伝来の絵画遺品の調査研究を続行、主として真言八祖行状図の調査と研究
- (4) 鳳凰堂壁画に関する調査研究を続行
- (5) 光学的方法による仏教絵画の遺品の調査研究、特に前記(2), (3)の作例に関する実証的な調査を実施

〔II〕 中国仏教絵画史の研究

- (1) 台北所在故宮博物院所蔵仏教絵画遺品の調査と研究
- (2) 敦煌請来密教関係絵画の研究を続行

猪川 和子（主任研究官）

〔I〕 飛鳥奈良時代彫刻史の研究

九州地方所在の奈良時代中央作例として注目される大分天福寺の塑像、及び長谷寺銅造観音像その他の諸像の調査・撮影を行った。

〔II〕 平安鎌倉時代彫刻の調査研究

平安時代以降の在銘，基準作例の調査・撮影を継続，文献資料の整理収集につとめた。

〔Ⅲ〕 尊像別分類による彫刻の研究

今年度は菩薩形像の研究として，京都，兵庫，和歌山，大分他各県の諸像の調査・撮影を行った。

田実 栄子（主任研究官）

〔Ⅰ〕 近世初期染織品の研究

〔Ⅱ〕 小袖の研究

〔Ⅲ〕 伝統的染織技術の調査・研究

〔Ⅳ〕 上代裂の研究

研究題目の中，特に力を注いでいる「近世初期染織品の研究」に関しては，上杉神社蔵の上杉謙信所用袴類，宮城県白石市の片倉家伝来太閤拝領小紋胴服，日光東照宮蔵家康所用小紋胴服，和歌山東照宮伝来服飾類の調査研究が昭和49年度の主なものであるが，特に和歌山東照宮伝来の服飾類五十余点は田実による昭和49年10月の新発見であった。「小袖の研究」は上記二領の小紋胴服や和歌山東照宮蔵品の家康所用小袖四領等の調査研究が主となり，「伝統的染織技術の調査研究」は前年に引続き「型染」に関するものが主，「上代裂の研究」は東京国立博物館蔵品の法隆寺裂や正倉院裂，昭和49年秋の正倉院展出陳染織品の調査を通してすすめた。

宮 次男（主任研究官）

〔Ⅰ〕 絵巻物の調査研究

未紹介作品の調査に重点をおき，根津美術館本地蔵靈驗記絵巻について写真撮影を含む調査と，この絵巻の地藏靈驗記絵巻諸本中における位置，並びにその製作年代と絵画様式史上の位置などを検討，その結果を「仏教芸術」97号に発表した。また矢取地藏縁起の全巻写真撮影を行い，調査結果を「美術研究」298号に発表した。その他，久留米善導寺蔵法然上人伝法絵4巻，東寺本弘法大師行狀絵巻11巻などを調査した。

〔Ⅱ〕 經典説話図の研究

V 研究活動及び事業

東北大学図書館蔵の法華経等紺紙経見返絵を調査したほか、関西個人蔵の見返絵を調査、撮影した。

〔Ⅲ〕 肖像画研究

鎌倉時代の大和絵肖像画について検討、特に「似絵」の意味と大和絵肖像画の成立について研究し、その結果を「比較芸術学研究」Ⅰに発表した。

関口 正之（第一研究室）

〔Ⅰ〕 密教絵画の研究

明王系の絵像と両界曼荼羅の調査研究を続行し、滋賀県西明寺三重塔四天柱に表わされた金剛界諸菩薩像を調査した。

〔Ⅱ〕 法華経絵画の研究

法華経曼荼羅の調査研究を継続して行ない上述の西明寺三重塔内部の壁画八面に描かれた法華経曼荼羅を調査した。

中村伝三郎（第二研究室長）

〔Ⅰ〕 明治以降彫刻史の研究

近代主要木彫家の業績についての調査研究。

〔Ⅱ〕 明治初期工芸界の動向に関する研究

特に明治初年来日のワグネルの業績について調査。

〔Ⅲ〕 現代美術の調査研究

立体造型を中心に現代美術の動向を総合的に常時調査考究。

関 千代（主任研究官）

〔Ⅰ〕 日本近代絵画史の研究

- (1) 東京芸術大学収蔵の小林古径筆下図・スケッチ類(2,000余点)の調査。
- (2) 長野県下伊那教育会主催春草生誕百年記念事業（作品展示・資料公開・記念講演会他）調査
- (3) 町田曲江作品調査（長野県信濃美術館）
- (4) 内田清之助コレクション（短冊）300余点の調査撮影

〔Ⅱ〕 明治初期美術行政家の調査研究

佐野常民・細川潤次郎他の調査

〔Ⅲ〕 現代美術の調査研究

常時開催の諸展観並びに現存各作家の談話聴取等

坂本 満 (第二研究室)

〔Ⅰ〕 近代美術における東西交流

16世紀より19世紀に至る汎世界的な美術の交流を、絵画を中心として研究

〔Ⅱ〕 西洋版画史

15世紀以降の西洋美術における版画の展開とその役わりを研究

陰里 鉄郎 (第二研究室)

〔Ⅰ〕 近代日本洋画の調査研究

〔Ⅱ〕 江戸洋風美術の調査研究

〔Ⅲ〕 現代美術の動向の調査研究

昨年度に引き続き大正期の画家と作品について調査を続行。佐賀県立博物館の展観企画に協力し、岡田三郎助、久米桂一郎の作品を調査した。また明治期に発表された美術・芸術論に関して調査し、その一部の筆者の年譜を作成した。江戸洋風美術については、川原慶賀の作品、文献資料の調査を続行。また司馬江漢の洋風作品と西洋版画との関連について調査研究し報告した。

川上 涇 (資料室長)

〔Ⅰ〕 中国絵画史の研究

中国絵画史研究の基礎作業として宋元明清代の作品ならびに画家資料の収集・整理を継続

〔Ⅱ〕 中国画論画史の研究

上記の研究に関し、酒田市本間美術館で開催された「近百年中国絵画展」の出品作品および東北大学図書館蔵狩野亨吉蔵書を調査した(49年6月)。

上野 アキ (主任研究官)

〔I〕 中央アジア古代絵画史研究

〔II〕 敦煌絵画の研究

昨年度科学研究費により収集した中央アジア及び敦煌の絵画資料の整理に当り、北道沿い遺跡を中心に壁画の様式展開について検討を行った。

江上 綏 (資料室)

〔I〕 平安朝書跡資料に施された絵画装飾，主として山水表現の研究

〔II〕 日本古代文様の様式的，形式的研究

この両研究の目的で，守屋コレクションを中心とする京都国立博物館所蔵または保管の經典類を調査した。他に，矢代幸雄氏所蔵の藤原時代法華経表紙の莊嚴画などを調査研究したが，三重県金剛証寺では，未紹介の装飾経一具を見出し，詳細に調査した。

鶴田 武良 (資料室)

〔I〕 筆記小説及び詩詞による画人並に絵画関係資料の蒐集

〔II〕 明清絵画の研究

とくに明末南京派，揚州派を中心に調査研究

河野 元昭 (資料室)

〔I〕 近世絵画資料の調査収集と研究

49年7月～8月東京大学美術史研究室の企画した「関東地方の美術館所蔵琳派絵画の研究」に参加，大倉集古館，根津美術館を調査し，9月同じく「京阪神地方個人所蔵琳派絵画の研究」に参加した。10月東北大学東洋日本美術史研究室企画の「秋田蘭画の研究」に参加，秋田市立美術館で開催中の秋田蘭画展出品作品を調査，撮影した。同月日光東照宮陽明門の探幽筆天井画を調査，狩野英信筆袖壁画とともに開所記念講演会で発表した。50年2月京都地方における探幽筆障壁画をテーマとし，大徳寺本坊方丈，法堂，妙心寺大方丈，法堂，西本願寺奥書院，聖衆来迎寺などを調査研究した。なお若い浮

世絵研究者と浮世絵研究会を組織し、毎月1回研究会を開いた。

＜ロ．特別研究＞

「浄土教関係の文化財に関する総合的研究」

分担課題	分担者
浄土教美術の成立と展開	久野健（第一研究室長）
浄土教関係諸尊像の整理及び様式変遷の研究	猪川和子（主任研究官）
来迎図の変遷	関口正之（第一研究室）
浄土変相の研究	柳沢 孝（主任研究官）
浄土教説話図の研究	宮 次男（主任研究官）
	江上 綏（資料室）
浄土教寺院における障壁画	河野元昭（資料室）
親鸞聖人筆蹟の研究	田村悦子（主任研究官）
浄土教関係の繡仏及び袈裟の研究	田実栄子（主任研究官）
敦煌画にみられる浄土教関係絵画と 我が国の作品との比較研究	上野アキ（主任研究官）
中国・朝鮮における浄土教絵画の展開	川上 涇（資料室長）
	鶴田武良（資料室）

平安時代中期以降浄土教信仰は、宗派にかかわることなく広く普及し、国民生活と密着して展開してきた。そのため浄土教が文化に及ぼした影響は多大である。よって、浄土教とそれに関する有形、無形の文化財との相互関係及び絵画・彫刻・工芸・芸能等各分野間の相関関係を美術芸能部門が総合的に調査研究するのをその目的とする。

本年度においては、彫刻部門では、7世紀から9世紀までの浄土教関係文献の整理を行い、また京都即成院、奈良吉田寺の阿弥陀如来像等の調査撮影を行なった。絵画部門では、来迎図関係の文献資料を収集整理し、法隆寺壁画の調査を行い、また経絵の研究を行った。書蹟部門では、浄土教諸師の宋代仏典学習に平行して、宋代書風が影響したという観点から親鸞筆蹟を検討し、工芸部門では、知恩院に伝わる刺繡袈裟貼屏風、無縫袈裟穀糸袈裟等の精密な調査と撮影を行った。浄土教の大陸美術との関係に関しては、本年度は主として敦煌における浄土教関係絵画資料の収集につとめ、浄土

教変相の成立について考察を行なった。

「日本近代美術の発達に関する明治

前・中期の基礎資料の調査研究」

本年度は、特別研究に関する成果報告の一環として、下記のような出版を行った。昭和44年度以降、本題に従って調査蒐集した多くの資料のうち、出版経費その他の事情により、止むなく掲載の範囲を重点的にしぼった。即ち、内容は官催の内国勸業博覧会、内国絵画共進会（各1, 2回）関係資料に限り、これを復刻の形で公刊することにした。さらに、これらに関する解説（沿革及び工芸・彫刻、日本画、洋画部門別各論、西欧の美術展と博覧会）博覧会年表等につき第二研究室全員がそれぞれ分担執筆した。表題は次の通りである。

「明治美術基礎資料集」

—第1, 2回内国勸業博覧会・同内国絵画共進会編—

<ハ. 科学研究費>

「院政前期より後期への様式展開に関する研究」（総合研究A 代表者 猪川和子）

分担課題・分担者

彫刻における新様式の誕生と展開	猪川和子（主任研究官）
彫刻技法の変化	久野 健（第一研究室長）
仏教絵画における二系統とその変化	関口正之（第一研究室）
同	田口榮一（東京大学文学部助手）
世俗画における院政前期と院政後期	秋山光和（東京大学文学部教授）
彫刻・絵画における装飾文様	江上 緩（資料室）
彫刻・絵画における製作者と 製作機構	水野敬三郎（東京芸術大学美術学部助教授）
院政前期・後期における社会的文化的変容	安田元久（学習院大学文学部教授）

院政前期より後期にかけては歴史上における転換期として重要な時期である。平安時代の伝統の変質と、新時代の諸要素の萌芽の時期として、美術史上の多くの問題点を、彫刻、絵画、歴史の専門家の緊密、有機的な協力によりこの期の様式展開を具体的に把握することを目的とした。

彫刻班は、基準作例の円成寺大日如来像、長岳寺、峯定寺、高田寺、天福寺諸像を調査撮影。絵画班仏画では東寺、来振寺の五大尊、神護寺等の多くの基準作を調査撮影。世俗画では源氏物語絵巻、伴大納言絵詞、年中行事絵巻、鳥獸戯画及残欠等詳査、装飾文様としては本願寺三十六人集、守屋コレクション装飾経等の文様の分類整理を行なった。また、分担各分野で文献資料を蒐集整理し、その結果得た新知見を、美術研究その他に逐次発表、刊行を行いつつある。

「1930年代中国絵画の研究」

(一般研究D, 鶴田武良)

当研究は民国初期における西洋画受容とその国画への影響の検討、及び20世紀前期の中国画人資料の蒐集を主なる目的としたもので、中沢家ほか数家所蔵の近代中国絵画の調査、民国期の刊行物による画人資料の蒐集をおこなった。美術研究293, 294号に発表した「中国画人資料1・2」はその成果の一部である。

- C 主要研究業績 ①:著書 ②:論文 ③:解説 ④:研究発表
⑤:講演・放送 ⑥:その他
昭和49.4～昭和50.3

岡 畏三郎 (美術部長)

- | | |
|---------------------|-----------------|
| ① フェウザン会について 「絵」126 | 日動出版 49.8 |
| ① 北齊「浮世絵版画大系」8 | 集英社 49.11 |
| ② 草土社の創立について | 美術研究297 50.1 |
| ② 内国勸業博覧会について | 明治美術基礎資料集 50.3 |
| ③ 栄松齊長喜「杯を持つ芸者」 | 日本経済新聞 49.12.13 |

V 研究活動及び事業

久野 健 (第一研究室長)

- ① 平安初期彫刻史の研究 吉川弘文館 49. 10
- ① 運慶の彫刻 平凡社 49. 10
- ② 宇佐, 天福寺奥院の仏像群 美術研究297 50. 3
- ② 大分, 長谷寺銅造観音菩薩像 美術研究298 50. 3

田村 悦子 (主任研究官)

- ② 御物 藤原行成筆敦康親王初覬関係文書について 美術研究297 50. 3

柳沢 孝 (主任研究官)

- ① 仏画 (BOB, 共著) 小学館 49. 7
- ① 法隆寺金堂壁画 (奈良の寺) 岩波書店 50. 2

猪川 和子 (主任研究官)

- ② 京都高田寺薬師如来像と藤原実方の歌 美術研究294 49. 7
- ③ 京都革堂行願寺千手観音立像 史迹と美術448 49. 10
- ③ 宇佐天福寺の仏像 美術研究297 50. 1
- ④ 高田寺薬師如来像の墨書について 美術部研究会 49. 5

田実 栄子 (主任研究官)

- ② 上杉家伝来鎧下着・着込み・頭巾等四領二個 下
——伝上杉謙信・上杉景勝所用服飾類調査報告 六——
美術研究294 49. 7

宮 次男 (主任研究官)

- ② 地藏霊験記絵巻について 仏教芸術97 49. 7
- ② やまと絵肖像画の成立 比較芸術学研究 I 49. 11
- ② 中世絵巻の展望 ミュージアム284 49. 11
- ② 矢取地藏縁起について 美術研究298 50. 3

- | | | |
|--------------|-------------------|--------|
| ③ 弘法大師絵伝残欠 | 古美術47 | 50. 1 |
| ④ シンポジウム「絵巻」 | 東京国立博物館小講堂 | 49. 11 |
| ⑤ 日本絵巻物の特質 | 国立社会教育研修所 | 49. 8 |
| ⑥ 絵巻物 | 文化財指導者講習会（大津日生ビル） | 49. 11 |

関口 正之（第一研究室）

- | | | |
|---------------------|---------|--------|
| ② 西明寺三重塔四天柱絵金剛界諸菩薩像 | 美術研究296 | 49. 11 |
| ④ 西明寺三重塔柱絵について | 美術部研究会 | 49. 5 |

中村伝三郎（第二研究室長）

- | | | |
|-----------------------------------|----------------|-------|
| ② 岡倉天心と日本近代彫刻 | アサヒギャラリー16 | 50. 1 |
| ② 明治前期の工芸・彫刻 | 明治美術基礎資料集 | 50. 3 |
| ③ アルキベンコ 主要文献抄
——大正末期から昭和初期へ—— | Gallery VOL. 5 | 49. 4 |

関 千代（主任研究官）

- | | | |
|--------------|-----------|-------|
| ② 松園から春草宛の書簡 | 下伊那教育104 | 50. 2 |
| ② 明治初期の日本画 | 明治美術基礎資料集 | 50. 3 |
| ⑤ 上村松園 | NHK | 50. 1 |

坂本 満（第二研究室）

- | | | |
|---|-----------|--------|
| ① 世界版画大系10.（T. アデマール，吉川逸治と
共同編集，翻訳，概論執筆） | 筑摩書房 | 49. 3 |
| ① 北斎漫画（平凡社ギャラリー） | 平凡社 | 49. 7 |
| ① 南蛮美術（BOB，吉村元雄氏と共著） | 小学館 | 49. 10 |
| ① コロー | 新潮社 | 49. 12 |
| ② 洋風画とリュウベンス | 美術研究295 | 49. 9 |
| ② 西欧の美術展と博覧会 | 明治美術基礎資料集 | 50. 3 |
| ③ 洋風美術の受容 | 学士会会報724 | 49. 7 |
| ③ ジャッリオ・ロマーノの象 | ちくま9号 | 49. 9 |

③ 挿画本研究 1-4

版画芸術 3-6号

陰里 鉄郎 (第二研究室)

- ① 万鉄五郎・熊谷守一(共著)「現代日本美術全集」18 集英社 49.5
- ② 岡田三郎助の芸術 佐賀県立博物館「百武・久米・岡田三人展」目録 49.9
- ② 万鉄五郎の版画作品 絵 128 49.10
- ② 茅ヶ崎時代の万鉄五郎(万鉄五郎画集) 日動出版 49.12
- ② 江漢の洋風作品とルイケンの銅版画 ミュージアム286 50.1
- ② 明治初期の洋画 明治美術基礎資料集 50.3
- ③ 石川孟高筆「獅子図」 美術研究295 49.9
- ⑥ 菊池大麓・フェノロサ・中江兆民・外山正一・森鷗外・大塚保治年譜
筑摩書房「明治芸術・文学論集」 50.2

川上 湮 (資料室長)

- ① 梁楷・因陀羅(共著) 講談社 49.12
- ② 「歴代名画記」をめぐる 中国古典文字大系月報57 49.6
- ⑥ 清朝の絵画 美術部公開学術講座 49.10

上野 アキ (主任研究官)

- ① アスタナ出土の伏羲女媧図について(下) 美術研究293 49.11
- ③ 中華人民共和国漢唐壁画展 美術手帖390 50.2

江上 綏 (資料室)

- ② 山水表紙絵のある藤原経の一遺例 美術研究295 49.9
- ④ 矢代氏蔵法華経表紙絵について 美術部研究会 49.7

鶴田 武良 (資料室)

- ① 近代中国絵画 角川書店 49.6
- ② 近百年來中国画人資料 1, 2 美術研究293, 294 49.11, 12

⑤ 水墨画の精神	NHK・TV	49. 10
⑥ 中国絵画の近代百年	美術部公開講座	49. 10

河野 元昭 (資料室)

② 渡辺始興筆写真鳥類図巻について	美術研究291	49. 3
② 狩野英信筆花鳥図壁画について	国宝東照宮陽明門修理報告書	49. 3
② 長谷川等誉の作品	国華968	49. 5
③ 日本絵画における柏・山吹・萱草(いけばな芸術全集8) 主婦の友社		49. 6
③ 日本近世絵画に描かれた柳 (同 12)	〃	49. 9
③ 日本工芸にみる楓の意匠 (同 11)	〃	49. 10
③ 木村葦葭堂筆彩竹図	国華975	49. 11
③ 鳥羽台麓筆石図	〃	〃
③ 谷幹々筆金魚図	〃	〃
③ 山東京伝筆高輪海浜図	〃	〃
③ 山東京伝筆出代り図	〃	〃
③ 谷文晁筆高士図	国華976	50. 1
③ 琳派の周辺(日本の歴史13)	暁教育図書	50. 3
⑤ 狩野英信筆袖壁唐油画の美術史的調査	開所記念講演会	49. 11

(2) 芸 能 部

A 概 要

芸能部は、日本の伝統芸能の保存に資するために必要な基礎的研究を行なうことを目的とし、演劇研究室・音楽舞踊研究室・郷土芸能研究室の三室より構成されている。

芸能部の研究目標としては、諸芸能の理念・構造・技法・技術及びその継承保存に関する研究などがあり、その研究に必要な資料の収集・整備、記録の作成としての撮影・録音などの作業を行なう。また研究の結果は、刊行・公開学術講座の開催などによって公表する。今年度は美術部との共同による特別研究「浄土教関係の文化財に関する総合的研究」(49年～52年度4カ年計画初年度)で各研究室とも浄土教に関する

資料の収集に専念し、多くの収穫を得た。

刊行物としては、「芸能の科学」6「東大寺修二会の構成と所作」刊行の準備、及び安原コレクション邦楽レコードの整理を続け、「音盤目録」Ⅲ・Ⅳの刊行準備を進めた。

公開学術講座は「法会と芸能・その技法」と題して、朝日新聞社との共催のもとに二日間にわたって開催し、大きな反響をよんだ。

演劇研究室

演劇研究室は、日本古典演劇について芸能学的・演劇学的に調査・研究を行い、またこれら諸芸能の周辺にあって伝統芸能の成立に深い関係を持つ諸分野についても、調査・研究を進めている。

本年度、演劇研究室では、各個研究として「寺院行事の調査研究」「地方芸能文化史における舞台の研究」「元禄歌舞伎の研究」「古典芸能便覧の作成」「芸能伝承方法の研究」を行ない、共同研究として、他の研究室との協力により「能の様式の研究」「浄土教関係の文化財に関する総合的研究」を行った。

音楽舞踊研究室

日本古典音楽および日本古典舞踊について芸能学的、音楽学的に調査、研究を行い、またこれら諸芸能の周辺にあって伝統芸能の成立に深い関係を持つ諸分野についても調査、研究を進めている。

現在、音楽舞踊研究室では、各個研究として「伝統歌曲の音楽分析的研究」「寺院行事の研究」「能の脚本史の研究」が進められており、共同研究としては「浄土教関係文化財に関する総合的研究」「能の様式の研究」に各研究員が参加している。

郷土芸能研究室

全国各地に分布伝承する民俗芸能を対象とし、それらの芸能の保存・活用に資するために必要な調査研究を行なっている。今年度は、各個研究として「沖縄の民俗芸能の研究」「獅子舞の研究」「郷土芸能の研究」「民謡の研究」「話芸・寄席芸の研究」が進められており、共同研究としては「浄土教関係文化財に関する総合的研究」「民謡歌詞集成の研究」に各研究員が参加した。また、例年行なわれる全国および地方別

の民俗芸能大会に出場した芸能の撮影・録音を行なった。

B 研究題目及び調査活動

<イ. 一般研究>

能の様式の研究（共同研究）

横道萬里雄（芸 能 部 長）

佐藤 道子（音楽舞踊研究室）

松本 雅（ ）（非）

能楽全般にわたる構成および技法の研究の成果を公表するための準備作業を、前年度に引き続いて行った。

民謡歌詞集成の研究（共同研究）

三隅 治雄（郷土芸能研究室長）

仲井幸二郎（郷土芸能研究室）（非）

各地伝承の民謡歌詞を既刊書目・現地調査資料等から採集する作業と、その整理と分析を行った。

横道萬里雄（芸能部長）

〔Ⅰ〕 能の様式の研究

一般研究の欄に記した通りである。

〔Ⅱ〕 寺院行事の調査研究

悔過会については奈良県の東大寺、盆会・施餓鬼会については神奈川県の光照寺、如法写経会・灌頂会については山形県の立石寺について調査研究を行った。

中村 茂子（演劇研究室）

〔Ⅰ〕 古典芸能便覧の作成

古典芸能の基礎資料となるべき年表・演目・流派・文献その他について網羅的な便覧作成の作業を進めた。

〔Ⅱ〕 芸能伝承方法の研究

三重県及び滋賀県で行なわれている太鼓踊を中心にその伝承方法について調

査を行なった。

宮本 瑞夫（演劇研究室）（非）

〔I〕 地方芸能文化史における舞台の研究

全国に分布する農村舞台のうち、とくに人形劇・歌舞伎など近世劇舞台の変遷・現況を明らかにし、あわせて、その伝承芸能・文献資料を収集・調査する。そのため、本年度は、福岡県飯塚市嘉穂劇場・宮崎県西臼杵郡日之影町大人・神奈川県川崎民家園などの近世劇舞台及びその芸能を調査・記録した。

〔II〕 元禄歌舞伎の研究

絵入狂言本・役者評判記・番付などによる元禄歌舞伎の研究。そのため、本年度は、岩瀬本「役者大鑑」の成立について・狂言本「あすか川」の上演年代についての調査・研究を行った。

柿木 吾郎（音楽舞踊研究室長）

〔I〕 伝統歌曲の音楽分析的研究

伝統歌曲の旋律様式を音楽的に分析し、その音楽性を音楽学的に解明する研究。次のような基礎研究が行われた。

- ① ソニーTC-4805型テープレコーダを用い、再生速度を変えながら精密な採譜を行うための諸問題と解決。採譜の作製。
- ② 旋律運動の形を比較分析するためのムード・グラフの開発と作製。
- ③ 歌詞の各語に与えられたピッチの様相を示す分布図の開発と作製。
- ④ 三味線の「手」と歌唱フレージングとの関係を比較するための「フレーズ・シラブル分布図」の開発と作製。
- ⑤ 旋律電子分析機Melographに関する研究と購入のための基礎調査。

佐藤 道子（音楽舞踊研究室）

〔Ⅰ〕 寺院行事の研究

寺院行事が内包する多種多様な要素の中から芸能的要素を抽出し、各宗派にわたる総合的比較研究を行ない、その変遷・分化をあとづけることを目的とするが、本年度は、41年度以降継続的に実施している東大寺修二会の研究調査についてのまとめと、特別研究による浄土教の研究調査に主眼を置いた。

前者に関しては、研究調査録の第一冊を作成し、また、芸能部主催の学術講座において、東大寺修二会の構成上の特色についての研究発表を行なった。

後者に関しては、特別研究の欄に記した通りである。

松本 雍（音楽舞踊研究室）（非）

〔Ⅰ〕 能の脚本史の研究 ―その構想について―

能（謡曲）の構成は句・節・小段・段というモザイク構造をとっているが、その段による一曲の構成にいくつかの類型のあることが指適されていた。いわば一曲を形作る「構想」にも様式性が認められるのである。そこで、実際に台本にあたってどのようなパターンがあるのかを抽出し、作者別・時代別の特徴などを探るとうとするものである。

今年度はまず現行曲といわれる200曲について分析・調査をおこなった。

三隅 治雄（郷土芸能研究室長）

〔Ⅰ〕 沖縄の民俗芸能の研究

沖縄の島々に伝承される各種芸能の調査研究を数年来行なっているが、今年度は沖縄本島北部に伝わる盆の芸能を重点的に調査し、代表的な盆踊エイサーの撮影・録音を行なった。また重要無形文化財「組踊」の保持者真境名由康、親泊興照、宮城能造から、沖縄古典芸能演技法に関する問書を行なった。

〔Ⅱ〕 獅子舞の研究

全国に広く分布する獅子舞のうち、とくに今年度は愛知・千葉の獅子舞を取り上げ、その分布状況についての調査を行なった。また現在富山県が行なっている県下獅子舞の調査研究の経過状況なども調査した。

仲井幸二郎（郷土芸能研究室）（非）

〔Ⅰ〕 郷土芸能の研究

芸能の行なわれる場所、及びその機会に発唱される詞章の芸謡的要素に関する研究で、本年度は前年度にひきつづき「道中の芸能」に関する研究・調査を行っており、その一環として伊和の神に関し、兵庫県方面に現地採集調査を行なった。

〔Ⅱ〕 民謡の研究

芸謡的要素を持つ民謡に関する研究を続行中で、上代から近世に至る日本の歌謡伝承の中に占める芸謡の位置を究明する目的をもって、特に本年度は近世歌謡の分析を行なっている。

〔Ⅲ〕 話芸・寄席芸の研究

落語を主として話芸・寄席芸を対象とする近世芸能の研究を、安原コレクション邦楽レコードの整理を通して続行中である。

<ロ. 特 別 研 究>

浄土教関係の文化財に関する総合的研究

研究課題

- ・わが国における浄土教芸能の展開 横道萬里雄（芸能部長）
 - ・念仏讃の研究 柿木吾郎（音楽舞踊研究室長）
 - ・六時礼讃の研究 佐藤道子（音楽舞踊研究室）
 - ・念仏踊の研究
 - ・念仏狂言の研究
 - ・練供養の研究
- } 三隅治雄（郷土芸能研究室長）

日本文化史上重要な位置を占める浄土教関係の文化財は、わが国民生活に密着して展開して来た。これを文化史的視野で総合的に研究することを目的とする。

本年度は、天台宗、浄土宗、浄土真宗本願寺派・大谷派・高田派・興正派・仏光寺派各本山の重要法儀と、千葉県・近畿地方の各地に伝存する念仏芸の研究調査、および大谷派の声明の代表的旋律型の録音を行なった。

C 主要研究業績 ① 著書 ② 論文 ③ 解説
④ 研究発表 ⑤ 講演・放送 ⑥ その他

横道萬里雄（芸能部長）

- ① 日本の音楽 - 歴史と理論 - (共著) 国立劇場 49. 10
- ④ 寺ゴト研究序説 東大中世文学会 49. 11
- ⑤ 能の音楽 銀座能楽堂 49. 4～9
- ⑤ 能の演出と世阿弥の能楽論 銀座能楽堂 49. 10～50. 3
- ⑤ 笛 NHK 49. 11
- ⑤ 法会のさまざま - 諸宗派の寺ゴト - 朝日講堂 50. 1
- ⑤ 中世の芸能 NHK 50. 3

中村 茂子（演劇研究室）

- ① 日本庶民文化史料集成 第1巻 神楽 三一書房 49. 9
- ③ 起源のナゾ 光文書院 49

宮本 瑞夫（演劇研究室）（非）

- ③ 学芸百科事典エポカ 4～10 旺文社 49. 4～50. 3
- ⑥ 歌舞伎評判記集成 5～7 岩波書店 49. 5～50. 3

柿木 吾郎（音楽舞踊研究室長）

- ② Music Analysis of a Traditional Song
—Meaning and Function of "Kobushi"— 音楽学, 第21巻3号 49. 3
- ② 民族音楽研究の方法 教育音楽, 第18巻7号 49. 7
- ② 日本の音楽とバイミュージカルティ 季刊邦楽, 第2号 49. 12
- ④ Mood Graphによる長唄旋律の分析 東洋音楽学会 49. 10
- ④ 日本歌曲における「小ぶし」研究 I 音楽学会 49. 10
- ⑤ アラン・ホバナスの日本の作品について 名古屋アメリカ文化センター 50. 3
- ⑤ 箏, 三味線, 尺八とその音楽様式 宮崎県研修センター 49. 7

佐藤 道子 (音楽舞蹈研究室)

- | | | |
|-------------|------------|-------|
| ④ 修二会の組み立て | 朝日講堂 | 50. 1 |
| ⑤ 東大寺修二会の構成 | 朝日古代史ゼミナール | 50. 3 |

松本 雍 (音楽舞蹈研究室) (非)

- | | | |
|---------------------|--------|-------|
| ② 作品研究「頼政」 | 雑誌「観世」 | 49. 5 |
| ② 道成寺と乱拍子 | 能楽タイムズ | 49.10 |
| ③ 曲目解説「右近左近」・「止動方角」 | 銀座狂言の会 | 49. 7 |
| ③ 曲目解説「鎌腹」・「二人大名」 | 銀座狂言の会 | 50. 3 |
| ③ 曲目解説「素襖落」 | 能楽鑑賞の榮 | 50. 3 |
| ⑤ 能楽講座・打楽器のリズム | 銀座能楽堂 | 49. 6 |
| ⑤ 能楽講座・装束と作り物 | 銀座能楽堂 | 50. 3 |

三隅 治雄 (郷土芸能研究室長)

- | | | |
|---------------------------|--------|-------|
| ① さすらい人の芸能史 | 日本放送協会 | 49.10 |
| ① 日本庶民文化史料集成1「神楽」(共編著) | 三一書房 | 49. 9 |
| ① 日本庶民文化史料集成11「南島芸能」(共編著) | 三一書房 | 50. 3 |
| ② 南島大和歌考(「日本文学史の展開」所収) | 桜風社 | 50. 1 |

仲井幸二郎 (郷土芸能研究室) (非)

- | | | |
|---------|--------------|-------|
| ⑤ 民謡の歴史 | 広島県社会福祉会館ホール | 50. 1 |
| ⑤ 民謡の知識 | 広島労働会館ホール | 50. 1 |

(3) 保存科学部

A 概要

文化財の材質・構造の科学的分析研究,並びに文化財のおかれている保存環境の科学的研究を行ない,これを基盤として文化財の保存に関する技術的研究をしている。換言すれば,文化財の自然科学的研究,文化財を資料とする科学技術史的研究,文化財の保存のための科学技術の応用研究の三方面がある。

研究組織としては、化学研究室・物理研究室・生物研究室の3研究室からなっている。

化学研究室

文化財及びその保存に関する化学的及び分析的調査研究並びにその結果の公表に関する業務をつかさどると規定されている。即ち文化財を構成している各種素材の同定・分析から老化・崩壊過程の究明とその防止の化学的研究である。分析には微量分析及び非破壊分析を主として行っている。又空気汚染の文化財への影響或は黴・細菌および虫害防除のための燻蒸剤をはじめ薬剤の適否、燻蒸後の薬剤廃棄等についての研究を行っている。

物理研究室

文化財及びその保存に関する物理的調査研究並びにその公表に関する業務をつかさどると規定されている。文化財自身の構造・強弱・安定等の研究のため、力学的試験を行ない或はX線写真・ γ 線写真等の特殊撮影を応用している。また文化財の保存環境に関し、採光・照明・温湿度等の文化財に及ぼす影響とその防止の研究を行ない、例えば美術品の展示、収蔵や梱包輸送に関し適正条件の設定と調節技術を開発する一方、新施設使用の際の必要処置の研究などを行っている。

生物研究室

文化財及びその保存に関する生物学的調査研究並びにその結果の公表に関する業務をつかさどると規定されている。文化財に使用され又随伴している動植物的材質の判定を行うとともに黴・細菌・昆虫等による文化財の被害の防除のため保存環境の改善並びに黴・細菌・昆虫等の採取・培養・同定並びに殺菌・殺虫のための薬剤と方法の開発を行っている。

特別研究「軸装等の保存および修復技術に関する科学的研究」は昭和49年度より3ヶ年計画で、修復技術部と共同して研究を開始した。

保存科学部が主として受けた受託研究は、中田横穴、加曽利貝塚、虎塚古墳に関す

V 研究活動及び事業

るものであり、中田横穴については研究を完了したが、後二者は来年度に継続する。

高松塚古墳の保存については、当部は二名の調査委員を送り、現地調査時に石室内環境の測定および制御に協力し、その際採取した試料の測定は部内でこれに協力している。

横穴等の保存環境条件の設定のための基礎調査として未発掘の埋蔵空間の調査は、神奈川県・桜土手古墳群の発掘時に計画、現地調査に参加したが、適当な対象古墳が得られなかった。

蛍光X線・X線回折等による非破壊的分析での材質同定、X線・ γ 線などの透視による内部構造、欠陥などの解明等は経常的手段として、指定、保存対策、修復処置の解決に役立てている。大気汚染、屋内汚染の調査、指定文化財の展示環境の条件設定の指導や調節に協力している。また漆、膠着剤などの有機材質に関する研究も行っている。

被害、虫害防除についても、被害調査と殺菌、殺虫処理の実施および指導を多数行っている。

B 研究課題及び調査活動

<イ. 一般研究>

新燻蒸剤弗化サルフリル(バイケン)に
関する研究(共同研究)

登石健三(保存科学部長)
江本義理(化学研究室長)
見城敏子、門倉武夫(化学研究室)
石川陸郎(物理研究室)
新井英夫(生物研究室)
森 八郎(生物研究室)(非)

新燻蒸剤弗化サルフリルの文化財への応用の適否を検討するため、従来の燻蒸剤、臭化メチル、酸化エチレンと併せて食害虫、微生物に対する薬効、文化財材質顔料、染料、金属等への影響の比較試験、不純物の究明、および排気回収装置の開発を前年度に継続して行い、最も優秀安全性のあるものの選定に努めている。

瑞鳳殿、伊達政宗墳墓発掘に伴う保存科学的調査(共同研究)(関連項目54頁)

見城敏子・門倉武夫(化学研究室) 新井英夫(生物研究室)

戦災で焼失した旧国宝瑞鳳殿の再建が本年企画され、その敷地内の墳墓が発掘されたが、仙台市の要請により、発掘時の石室内の環境の空気組成、温湿度および有機ガスの測定、微生物調査を行い保存状態を測定し、発掘時にとるべき保存上の処置につ

き助言を行った。(49.10)

その後、出土遺品(刀剣、漆芸品、金属製品等)の今後の保存と修復について、登石、西川両部長が調査、指導を行った。(49.11)

いづれも、相対湿度90%を越す石室内から取出されたもので、どのように平常状態にして行くかが大きな課題であり、保存科学・修復技術両部の共同で、保存環境の条件設定、保存箱、保存処置の調査、指導を行うこととなった。

レオナルド・ダ・ビンチ展への協力(共同研究)

登石健三(保存科学部長)
門倉武夫(化学研究室) 三浦定俊(物理研究室)
新井英夫(生物研究室) 森 八郎(生物研究室)(非)

国立科学博物館に出品された4点の板絵は、現地で0°C、100%R. H. で保存されていたことが伝えられ、わが国での展示期間中 10°C以下、90%R. H. 以上の環境保持に務めた。

会期末頃に、板絵側面および裏面に昆虫の食害粉の排出が認められたので、防虫処理のため燻蒸を行った。その際排気回収処理に活性炭による回収装置を用い好結果を得た。また10°C、90%R. H. に保っていた展示ケース天井に黴が発生し、防除処置を実施した。(49.8)

既発掘古墳等の保存対策(共同研究)

発掘後の横穴古墳等の温湿度、壁画、壁面の状態の経時変化を調査し、保存対策に關して指導助言を行った。

(1) 東京：日野市坂西横穴

登石健三(保存科学部長)
江本義理(化学研究室長)
見城敏子(化学研究室)
樋口清治(第二修復技術研究室長)
青木繁夫(第一修復技術研究室)

発掘時に立会い温湿度の測定および保存上の応急処置を指示、その他50年2月、温湿度の測定、保存施設、顔料、土質、壁画の保存処置につき調査を行った。

(2) 福島：羽山装飾横穴

登石健三(保存科学部長)
江本義理(化学研究室長)

前年度の発見直後の調査から1年半経過の49年12月、温湿度、壁面の劣化状

況を調査し、保存施設に対する助言を行った。

(3) 大分：臼杵石仏保存対策

50年3月、東京国立文化財研究所に於て開かれた、臼杵石仏保存対策委員会に、登石健三、江本義理（保存科学部）、西川杏太郎、樋口清治（修復技術部）が参加した。

施設内保存環境の調査（共同研究）

登石健三（保存科学部長）
石川陸郎（物理研究室）

展示或は収蔵施設内の温湿度、照明等の保存環境の適否の判定、新設施設のシーリングの検討の調査を実施して来ている。本年度の調査対象を下に記す。

- a 宮城：東北歴史資料館
- b 群馬：県立近代美術館
- c 東京：憲政会館，大倉集古館，都美術館
- d 静岡：沼津市歴史民俗資料館
- e 大阪：観心寺収蔵庫
- f 奈良：飛鳥資料館
- g 広島：平和記念資料館
- h 福岡：北九州市美術館

モナリザ展示への協力（共同研究）

登石健三（保存科学部長）
石川陸郎，三浦定俊（物理研究室）
門倉武夫（化学研究室）

東京国立博物館において5月を中心に50日間モナリザの展示が行なわれたが、これには温湿度・照明等に関してかなり厳密な条件が課せられた。これらの点につき博物館に協力、展示計画に参加。

展示ケース内相対湿度安定化のため調湿ゲルの調整封入、ケース内温湿度の測定、会期途中におけるゲルの微調整等、会場内の粉塵測定を行った。照明光源としての蛍光灯特性の測定、紫外線・赤外線除去、照度一様化に関する研究と実施への寄与を行った。

結果は極めて満足すべきもので、温湿度は全会期を通じて安定しており、照明についてもフランス側係員からの満足の表明を得た。

（詳細の報告は保存科学14号に行っており、）

特史・国宝：高松塚古墳壁画等保存対策への協力（共同研究）（関連項目55頁）

江本義理（化学研究室長）門倉武夫（化学研究室）新井英夫（生物研究室）

文化庁の要請により、壁画等保存対策に関して、美術工芸課、記念物課に協力し、修復技術部と共同して調査研究を行った。

(1) 副葬品の材質およびさびの分析（江本）

副葬品の保存に際し、鏡、刀装金具、棺金具類につき、材質および腐食生成物のX線分析を行い、腐食生成物に塩基性塩化物を検出し、保存処置に助言を行った。

(2) 現地調査時の石室内、施設内の環境等調査（江本）

壁画の現地調査時には、石室内、保存施設内外、および調査員の入室時の湿度、炭酸ガス濃度、微生物等の環境変化の基礎データの収集、壁画の状態調査、石室内の空気浄化処理等に当たった。この際に沢田正昭、猪熊兼勝両技官（奈良国立文化財研究所）の協力も得た。（49.11）

開口時採取した試料は研究室に持帰り、石室内空気試料はガスクロマトグラフィーにより組成を測定（門倉）および微生物因子は培養後計数、分離を行っている。（新井）

(3) 保存施設完成後、施設、設備等の点検に参加した。（50.2 江本）

壁画修復分科会（49.8.9 江本）に委員として参加した。

微、微生物、昆虫等による文化財の劣化およびその防除に関する研究

（共同研究）

新井英夫（生物研究室）森 八郎（生物研究室）（非）

文化財に対するカビおよび食害虫による生物劣化の調査研究をおのおの分担しており、薬剤による殺菌、殺虫効果の検討とその使用法に関する研究を共同して行っている。

カビ、虫害被害調査および防除に関し、共同して行った対象としては上総博物館展示ケースの虫害調査を実施し、加害虫がヒラタキクイムシ・ヒメマルカツオブシムシであることを同定（49.7）、バイケン燻蒸を指導した（49.8）。茨城県歴史博物館茂木邸の竹材に虫害発生、チビタケナガシクイを同定（49.8）、被覆燻蒸を指導（50.2）、宮内庁桂離宮御殿の解体修理に先立って、生物学的被害調査を実施し、修復時の木材の生物劣化防除処置方法について報告（49.10）。

広島平和記念資料館収集被爆資料の生物被害調査、防除対策を指導(49.12)などを行った。(関連項目55頁)

登石 健三 (保存科学部長)

〔I〕 新設の収蔵、展示施設内の保存環境

施設建設過程、使用材料等と屋内汚染との関係を実際の新設施設について調査した。

〔II〕 地下水分の行動に関する研究

古墳或は遺跡の保存に関連して、地下における水分の行動を理論的に研究した。

これまで地下水の行動についての工学的な扱いはなされているが、水蒸気を含めての理学的扱いの方が古墳或は遺跡地表の保存の上では重要である。水及び水蒸気が移動するについてはそのポテンシャルを考えねばならず、又更に温度差があるときは蒸発、凝結が伴って問題を複雑とするが、水分移動の法則が明らかとなり、これによって古墳・遺跡についての保存上の基本方針に到達することが出来る。

江本 義理 (化学研究室長)

〔I〕 文化財の材質に関する研究

- (1) 非破壊的方法、微量試料による諸分析法とそれらの精度向上に関する研究。
- (2) 広範囲の材質の判定と、それらの劣化現象の機構を解明し、一方、年代、産地の標準試料の材質に関する分析データの蓄積を行っている。

考古資料の青銅器、鏡等の金属器、古墳およびモンゴル建築彩色、初期油絵、絵馬等の顔料等を主としてX線分析により調査し、それらの技法との関連を推定した。

〔II〕 考古遺物、遺跡に関する考古化学的研究

遺物の埋蔵環境、発掘時、保管時における変質現象の過程および機構の究明を目的とし、風化、変質、腐食生成物の同定、析出状況、土壤中の可溶性塩類の挙動およびその成分等につき、地下水や気象条件との関連を考慮して横

穴、遺構等の調査を行っている。

〔Ⅲ〕 保存環境の文化財に及ぼす影響に関する研究

汚染因子が文化財に劣化、腐食等の影響を与えるので、その程度や影響の有無の判定を金属薄板の大気腐食の測定等により行っている。調査対象は宮島・厳島神社建築彩色、大垣市・徳勝寺梵鐘（重文）富士市・富士美術館等で継続して調査を行った。

見城 敏子（化学研究室）

〔Ⅰ〕 塗膜の硬化および劣化過程の研究

漆の硬化および劣化過程の基礎的研究から塗膜組成および理想的保存環境の追求。

- a 漆に酸、アルカリ、塩を添加し、硬化状況を検討し、硬化速度を知った。
- b 漆と油との混合物の I.R.スペクトルから、漆膜の同定の際、油の存在の有無について、特殊吸収を見つけた。

〔Ⅱ〕 未発掘古墳環境の研究

古墳などの密閉環境で漆芸品は極めて好適に保存されている場合がある。この好適保存環境を知るために、温湿度測定、土壌の吸着成分及び含水率、酸化還元の測定、空気中の有機ガスの有無を測定。古墳および墳墓によっては有機ガス特にアミン性ガスがかなり高濃度に土壌に吸着、且古墳内の空気中にも存在を認めた。かかるアミン性ガスが漆塗膜の硬化、劣化への影響を研究中である。

〔Ⅲ〕 発掘直後の漆芸品の保存対策の研究

発掘された漆芸品類は高湿状態の保存が適当とされているが、空中保存が可能か否かの検討を行った。この場合、湿度および雰囲気組成が重要である。発掘された湿度条件を密閉器に再現し、漆塗膜の劣化過程を研究中である。又この結果から、有機ガス、不活性ガス等について研究を行った。

〔Ⅳ〕 新しい陳列ケース内における油絵、漆芸品の保存対策の研究

新しいコンクリートの施設内で著しく油膜が劣化し、表面に白い結晶の様なものを析出する。コンクリートの表面に桧材等を内張すると、ある程度劣

V 研究活動及び事業

化防止出来るが、桧材からヤニ状のものが揮散して、油絵、漆芸品の表面に付着する。これら桧材その他の木材、および新建材からの揮発成分の油絵の影響を研究する一方、調湿剤として使用しているゼオライトが種々の有機ガスを吸着することがわかり、一時的保存法に成果をあげている。

門倉 武夫（化学研究室）

〔Ⅰ〕文化財の保存環境に関する研究

文化財の保存、展示環境に及ぼす汚染空気の影響を究明するため、環境空気中のイオウ酸化物、窒素酸化物を測定し、特色ある寺院の環境について汚染因子の挙動、経年変化を調査続行中、調査対象として、上野公園内（2ヶ所）奈良国立博物館（5ヶ所）、富士美術館（5ヶ所）、比較として住宅地（2ヶ所）で月別の変化を、京都国立博物館、平等院、三溪園、高徳院の年変化を測定した。

文化財環境における粉塵の挙動を究明するため奈良国立博物館の展示場、収蔵庫、ケース内において粉塵濃度と観覧者との関連を調査した。その他、粒度分布と気象、あるいは観覧者との相関、粉塵の走査電子顕微鏡による観察などを行った。

〔Ⅱ〕古墳内部空気組成に関する研究

古墳及び発掘品の保存環境を究明するため未発掘古墳内部空気組成の測定法を研究した。

主としてガスクロマトグラフィーを用い、空気採取方法、分析条件を検討し、炭酸ガス、酸素、窒素及び一部の有機ガス等の測定条件を確立した。

〔Ⅲ〕燻蒸剤廃棄処理に関する研究

燻蒸後の廃棄ガスの無害排気方法を研究、前年度試作した排気処理装置を改良し、実験を行った。

〔Ⅳ〕文化財材質の微量分析

微量試料の分析方法として検鏡分析を取り入れ、微量試料による分析を試みた。1mg以下の試料で鉄、鉛、銅、銀、硫酸イオン、塩素イオンその他の分析を行った。

石川 陸郎（物理研究室）

〔Ⅰ〕 新施設内の保存環境

施設内の温湿度測定と偏苛性度の測定を実際の新施設について調査研究を行った。これ等の施設を調査して言えることは竣工後ただちに空調機の作動もしくは換気をしないために、内装材にカビの発生が著しいことがあげられる。工期にも問題があろうが、博物館等の建設に当たっては工事の進行順序を変更する必要があると考える。

〔Ⅱ〕 博物館、美術館等の照明について

現在市販されている蛍光灯の分光特性をチェックし各種美術品に適する蛍光灯の選定を行なっている。また紫外線除去効果の測定を行った。

〔Ⅲ〕 放射線による透視研究

X線、 γ 線の透視により建造物、美術工芸品等の構造解明、腐朽状況の判定を行っている。

〔Ⅳ〕 古代青銅器の製作技法に関する研究

鑄造時における巣の状態をX線透視によって判定を行ない、成分との関係を知るとともに、合金を構成する成分の差によって鍛造の可否を研究している。

三浦 定俊（物理研究室）

〔Ⅰ〕 文化財の温湿度環境とその調整に関する研究

(1) 材質からの吸放湿

紙・木材からの水分の吸放湿について、その時間的変化（動特性）に注目して実験・研究を行っている。

(2) 建造物内の温湿度環境

古建築内部の温湿度環境について、浄瑠璃寺（京都）を対象に継続調査を行っている（47.6～）。また新築収蔵庫についても、東京国立博物館新収蔵庫を対象に継続調査を行っている（49.3～）。

(3) 古墳内の温湿度環境

桜土手古墳を対象に、未発掘古墳石室内部の調査を行った（49.9～10）。

V 研究活動及び事業

またこの研究に関連して、高湿度領域で信頼性の高い湿度計の開発研究を行っている。(受託研究 加曽利貝塚の項参照)

〔II〕新しい計測技術の保存科学への応用

(1) リモートセンシング

従来の赤外線フィルムより性能の高い、赤外線TVカメラの文化財への応用について、基礎的な実験と調査研究を行った。

(2) 超音波技術

文化財の損壊や、力学的性質の変化に対して、超音波を用いた測定法の基礎実験と調査研究を行った。

新井 英夫 (生物研究室)

〔I〕微生物劣化およびその防除に関する研究

文化財の各材質に発生する微生物による被害調査とその分離ならびに生育条件を調査研究。

カビ等微生物に関しては昨年に引き続き、法隆寺焼損壁画表面に発生する糸状菌の防除対策について実施した。

奈良南明寺重文、木造薬師如来像に発生した糸状菌について調査し、その防除対策を検討した (50.2)。

岐阜県下呂八幡神社の重文木造神像、および明星輪寺重文木造地藏菩薩半跏像等の生物被害調査を実施した (50.3)。

昨年度に引き続いて行われた福井県岩内山古墳発掘時の保存科学的アプローチに参加した (49.8)。

森 八郎 (生物研究室) (非)

〔I〕虫害およびその防除に関する研究

加害昆虫の採集と種類の同定、被害状況の調査、環境条件と発生原因などの調査研究。

食害虫被害に関しては下記の如き調査を行なった。

東京都水道局管理部所蔵資料 (上水記11冊および地図) (49.8)。

岩屋寺（愛知）所蔵重文宋版一切経（49.10）。

国立西洋美術館所蔵絵画（50.2）。

藤井育成会有隣館（京都）内敷物の加害虫がコイガであることを同定した（50.2）。

＜ロ．特別研究＞

軸装等の保存及び修復技術に関する科学的研究

（修復技術部と共同研究 59頁を参照）

＜ハ．受託研究＞

史跡中田横穴保存状態調査研究

登石健三（保存科学部長） 江本義理（化学研究室長）
見城敏子，門倉武夫（化学研究室）
新井英夫（生物研究室）

いわき市にある横穴古墳で，昭和44年1月に発見され，可及的速かに切取斜面保護，開口部の閉切り，前室コンクリート施設建設が行われた横穴保存上のモデルケースの一つといえる。その条件下における保存状態の実地調査研究を保存科学部に委託せられ，昭和47年より3年間受託研究を行い，49年度で一応の結論に至った。

この年度は6月及び1月の二季の状態を調査，特に外気高温時と寒冷時の古墳内部における室空気及び水分移動の結論の確認を行い，又工事後の安定化を認めることが出来た。これまでに土質・壁画材質等の分析・変質過程，微生物繁殖防止，或は古墳内空気組成・温湿度調査，汚染防止についても結論に達しており，それによって将来の維持・保存，僅か乍ら改善すべき点についての指針も得られた。

この研究の報告書は，いわき市において，近く刊行される。

史跡虎塚古墳石室彩色壁画保存のための調査研究

登石健三（保存科学部長） 江本義理（化学研究室長）
見城敏子，門倉武夫（化学研究室）
新井英夫（生物研究室）

勝田市にある前方後円墳で，発掘時点から石室内状態，壁画，顔料，石材等の調査

V 研究活動及び事業

を行っている。発掘以前の状態から、開口、閉鎖の経過をたどり、その後の推移を知るための貴重な研究対象である。

今年度第2次の発掘調査が行われ、その結果を合わせて保存施設を考えるということで、現在は石室は埋戻されている。埋戻しの際、石室に届くパイプを埋設したので、このパイプより石室内温湿度、空気組成、有機ガス、微生物等の状態を研究している。

石室内は炭酸ガスが多く、又酸素の消耗がある。微生物相は担子菌類が多いのが特徴である。又内部空間および土中に有機ガスの存在が認められた。

史跡加曽利貝塚遺跡の保存に関する研究（修復技術部と共同研究 関連項目60頁）

登石健三（保存科学部長）
江本義理（化学研究室長）
石川陸郎、三浦定俊（物理研究室）
新井英夫（生物研究室）

前年からの継続で住居跡および貝層表面の白色析出物の湿度調節による析出防止について実験を行ってきたが、ことに貝層断面における加湿コーナーの密閉度をよくした。また梅雨時には湿度100%になり樹脂の膨潤現象が見られたことから高湿度領域における調湿素子を設け93%に設定した。平均92~93%を保持しているが、しかし乾燥期又は晴天時の気温が最高に達した時期には、70%台へと下降する傾向が見られた。

生物関係では、加湿コーナーにおける貝層断面下の土壤に異様な形態の微生物が発生した。当初これは藻類であるという想定の下に調査したが、藻類に該当するものが見当らず目下研究中である。また同コーナー最下部に白色線毛状のカビが発生したが、採集分離中である。また仕切り板に用いたベニヤ板に *Penicillium* SP（青カビ）が発生した。これ等の微生物を PCP-Na の1%水溶液を噴霧し殺菌したが、その他の薬剤についても検討中である。

化学的には、土中の各層の可溶性アルカリ土類の定量、および土層の脱塩法を研究中でなお継続して実験を行う必要がある。

国宝・重文 日光社寺文化財保存の研究（修復技術部と共同研究 関連項目60頁）

登石健三（保存科学部長） 江本義理（化学研究室長）
見城敏子（化学研究室） 三浦定俊（物理研究室）

日光ではその特殊な環境から、指定建造物の彩色、金具等に退色、腐食等の保存上の問題が生じ、その原因究明と対策の研究が委託された。

1. 漆箔鉄金具類の耐久処理法
2. 漆の劣化防止法
3. 唐油彩色、生彩色に見られる異常な変退色現象の調査
4. 膠、胡粉等の材料の品質低下と接着性、耐久性の検討
5. 木材腐朽、およびカビ、虫害の防除
6. 温湿度環境調査

上記の課題が提起され、49年12月 山内建造物について、劣化現象の起っている部分、生物劣化の被害等を調査した。50年1月、劣化現象の解明の基本である気象条件の観測のため自記温湿度計を設置し、測定を開始した。また、日光で修理に使用している漆、顔料、膠等の材料についての材質調査、テストピースによる、異つた湿度条件での劣化実験等の基礎実験を開始した。

<二. 科学研究費>

遺物の埋蔵および保存環境における変壊現象に関する研究

（一般研究C、江本義理）

考古遺物の埋蔵時における地下水、土壤等の環境による変質と、発掘時から起る大気中の変質、および保管中の崩壊現象の機構、過程を解明し、適切な保管、保存処置を施すための基礎研究で、考古化学の一分野として発展させるのを目的とする。

福島市：岩谷観音石仏、原の町市：羽山横穴、勝田市：十五郎穴等の石室、保管中の出土木器表面に、乾燥時期に発生した白色析出物をX線分析により分析し、硫酸カルシウム、硫酸ナトリウム、炭酸カルシウム等を検出。

宮城：多賀城跡、広島：草戸千軒遺跡において、湧水、地下水等につき pH、溶存酸素、COD、二価の鉄等の測定を行ない、埋蔵環境調査を行なった。

保管中のテラコッタ、粘土板に析出した塩化ナトリウム等の脱塩処理を施し、好結

果を得た。

発掘時における漆芸品の保存処置の研究

(一般研究D, 見城 敏子)

- 1) 初期の古墳内では腐朽ガスが充満し、ガスは土壤に吸着、平衡状態になっていると考えられる。未発掘の古墳内の空気、土壤に吸着しているガスを分析すると、アミン系統の有機ガスが抽出された。
現在、研究室で古墳内で検出された二酸化炭素、アミンをデシケーター中に注入し、その中で顔料の変退色、漆塗膜の劣化を見ており、まだ短時日で明瞭な結果は得られないが、空気中と比較して概ね良好である。
- 2) 草戸千軒から発掘された直後の漆器を塩の水溶液につけておいたものと真水につけたものと比較して、塩の水溶液の方が劣化が少ない。(但し三ヶ月間の期間の結果)。

<ホ. 在外研究員>

江本 義理 (化学研究室長)

文部省在外研究員(短期)として9月6日より11月5日迄、イギリス、ベルギー、オランダ、フランス、イタリアに出張し、博物館、美術館附属の研究所等において、出土遺物の考古化学的研究に関し、材質の微量分析、金属器の保存処置、フレスコの技法および保存処置等の調査を行なった。

C 主要研究業績

① 著書 ② 論文 ③ 解説
④ 研究発表 ⑤ 講演・放送 ⑥ その他

登石 健三 (保存科学部長)

- | | | |
|---|----------|--------------|
| ② 「国宝東照宮陽明門」一部分担 | 国宝東照宮陽明門 | 49. 3 |
| ② 美術館・博物館の空気調和について | 建築設備 | 281 49. 7 |
| ② モナリザ展示の科学面について | 建築設備 | 282 49. 8 |
| ② 発掘に際しての科学的心がまえ | 考古学雑誌 | 60巻3号 49. 12 |
| ② Conservation of organic museum objects in Japan | | |

「Studies in Museology」(インド) 49.

- ② モナリザ展に際しての温湿度調整（共著） 保存科学14 50. 3
- ② モナリザ展に際しての照明について（共著） 保存科学14 50. 3
- ② 中田横穴保存状態調査研究総括 中田横穴保存状態調査研究報告書 50. 3
- ④ 発掘古墳でとるべき応急保存処置
考古学のための自然科学研究会 50. 2
- ⑤ 日光東照宮陽明門における絵画，天井板絵及び袖壁唐油画の科学調査
開所記念講演 49. 11
- ⑥ 東京におけるモナリザの展示について 慶応工学会 49. 11
- ⑥ 文化財の保存技術 岐阜県高山市 50. 1
- ② ゼオライトによる空気浄化（共著） 保存科学14 50. 3

江本 義理（化学研究室長）

- ② 天井絵についての調査：天井絵の顔料分析 国宝東照宮陽明門 49. 3
- ② 唐油彩色壁画についての調査：蛍光X線・X線回折による材質分析
国宝東照宮陽明門 〃
- ② 金沢城石川門鉛瓦の放射化分析 Isotope News 246 50. 1
- ② 国宝唐招提寺金堂内部天井部彩色保存処置（共著） 保存科学14 50. 3
- ② 壁画の老化に関する調査研究
特別史跡王塚古墳の保存・福岡県教育委員会 50. 3
- ② 石材の風化に関する調査研究
特別史跡王塚古墳の保存・福岡県教育委員会 50. 3
- ② 中田横穴の岩質および壁画の劣化に関する研究
中田横穴保存状態調査研究報告書 50. 3
- ③ 古文化財の放射化分析 中部原子力情報 4 49. 8
- ④ 関東・東北地方所在の装飾古墳の顔料と析出物について
考古学のための自然科学シンポジウム 50. 2
- ④ 屋外文化財の腐食状況 腐食防食協会，大気汚染金属腐食分科会 50. 2
- ⑥ 欧州研修報告 古文化資料自然科学研究会例会 50. 2

V 研究活動及び事業

見城 敏子（化学研究室）

- ② 唐油彩色壁画についての調査 油及漆に関する材質的研究
国宝東照宮陽明門 49. 3
- ② ゼオライトによる空気浄化（共著）
保存科学13 50. 3
- ② 漆塗膜に関する研究（第4報）漆塗膜の硬化に及ぼす電解質の影響
色材協会誌48-2 50. 2
- ② 中田横穴内の温湿度調査 中田横穴保存状態調査研究報告書 50. 3
- ⑤ 文化財の保存環境 日本婦人科学者会 50. 3
- ⑤ 木材から放出される化学的成分とその文化財に及ぼす影響
文化財保存修復研究協議会 49. 9
- ⑥ 漆工技術とその科学的アプローチ 日本漆工No281 49. 11

門倉 武夫（化学研究室）

- ② 文化財環境の塵埃に関する研究〔Ⅰ〕
奈良国立博物館に於ける調査 保存科学14 50. 3
- ② 中田横穴内空気組成に関する研究
中田横穴保存状態調査研究報告書 50. 3

石川 陸郎（物理研究室）

- ② 天井絵取降作業に伴うX線透視調査 国宝東照宮陽明門 49. 3
- ② 陽明門両袖牡丹透影羽目下唐油画のX線透視 国宝東照宮陽明門 49. 3
- ② モナリザ展示に際しての照明について（共著） 保存科学14 49. 3

三浦 定俊（物理研究室）

- ② モナリザ展示に際しての温湿度調整（共著） 保存科学14 50. 3
- ④ 紙と木の湿度調節機構（共著） 第13回S I C E学術講演会 49. 8
- ④ 紙や木の湿度自己制御機構の研究 日本建築学会全国大会 49. 10

新井 英夫 (生物研究室)

- ② 文化財の生物劣化 「防菌・防黴」誌2巻, 3号 49. 6
- ② 書籍の生物劣化とその防除 (共著) 保存科学14 50. 3
- ② 中田横穴内の微生物に関する研究 中田横穴保存状態調査報告書 50. 3
- ④ 石造文化財の細菌による劣化 第31回日本細菌学会関東支部総会 49. 7
- ④ Microorganisms found in a virgin tumulus
第1回国際微生物連合会議 49. 9
- ④ 古墳の微生物学的問題について 第4回微生物生態シンポジウム 50. 1
- ⑤ 文化財と微生物 慶応工学会例会 49. 7
- ⑤ 生物学的破壊因子とそれに対する化学的処理
昭和49年度文化財建造物主任技術者講習会 49. 7
- ⑤ 「保存と環境」防殺虫, 黴の知識 指定文化財展示取扱講習会 49. 8, 12

森 八郎 (生物研究室) (非)

- ② 国宝・重要文化財閑谷学校の虫害調査
しろあり22 (日本しろあり対策協会) 49. 11
- ② 書籍の生物劣化とその防除 (共著) 保存科学14 50. 3
- ② 葉香の防虫効果 保存科学14 50. 3
- ④ 新燻蒸剤弗化サルフリル (Sulfuryl fluoride)
日本衛生動物学会大会 49. 4
- ④ 同 上 (第2報) (共同研究発表)
日本応用動物昆虫学会大会 49. 8
- ⑤ 正倉院の防虫 日本短波放送 49. 8
- ⑤ 虫害と黴害 (共同発表) 文化財保存修復研究協議会 49. 9

(4) 修復技術部

A 概要

修復技術部は, 文化財の修復に関する科学的, 技術的調査研究とその公表を主務とする部で, 保存科学部が, 主に文化財の保全に係わる科学的分析研究を司る部である

V 研究活動及び事業

のに対し、修復技術部は、老化破損し、あるいは後世の付加物のある文化財について、もとの正しい状態に修理し、あるいは復元する方法についての科学的、技術的研究を担当している。

研究対象としては、絵画、書跡、彫刻、工芸品、考古資料などは勿論、木造建造物の組物や細部に描かれた絵や、石造構築物などに及ぶ、極めて広範囲の文化財があげられる。

研究組織としては、二研究室六研究員からなっている。

第一修復技術研究室

木材および漆を主材料とする文化財の修復に関する科学的・技術的調査研究とその結果の公表を主務とするが、現在は石・金属その他無機材質のものも研究対象とされている。

将来第三研究室開設が可能になった場合は、そこで無機材質の文化財の研究が行われる予定である。

第二修復技術研究室

紙、繊維または皮革を材料とする文化財の修復に関する科学的、技術的研究とその結果の公表とを主務とする。

両研究室とも、経常的な研究として、有形文化財を構成している材料、構造、製作技法についての研究や、それらを修復するための伝統技術の整理大系化と科学的裏付けの資料集積、そしてさらに科学的な材料、技法の修復への応用と開発のための臨床的な研究などを実施しており、とくに材質強化、補強、接合、剝落防止、朽損部充填等について各種の合成樹脂の応用と技法の開発に務めている。

これらの研究過程においては、保存科学部との共同研究が必要な部分もあり、また部内においても、一つの文化財が二つの研究室にまたがる複合的な材質からなる場合も多く、それらについては両研究室員による共同作業によって研究が進められている。これらの詳細は次項に記す通りである。

特別研究「軸装等の保存および修復技術に関する科学研究」は、本年度から三ヶ

年の継続研究として、その研究を保存科学部と分担して実施した。その成果は三ヶ年の研究を終了した時点で、公表の予定である。

受託研究は、(1) 重文・名古屋城旧本丸御殿杉戸絵の保存処置法の研究。(2) 長野県指定文化財・松本市桜ヶ丘古墳出土金銅天冠の保存処置の研究。(3) 三重県津市古墳出土押出仏修復保存処置の研究を実施して大きな成果をあげた。その他保存科学部との共同による史跡・加曽利貝塚の科学的保存の研究、日光社寺文化財保存の研究などを実施している。

なお修復技術部は、昭和48年に新たに発足した部門であり、研究資料としての過去の文化財修復記録の蒐集が不十分であり、その整備が急がれているが、本年度は、文部省科学研究費（一般研究C、研究代表 西川杏太郎以下部内研究員5名分担）の交付を受け「古美術品修復技法の資料蒐集とその基礎的研究」として、主に彫刻の修復記録蒐集整備を行った。

B 研究題目および調査活動

<イ. 一般研究>

仙台市、伊達政宗霊廟（瑞鳳殿）墓所出土副葬品の保存に関する調査

（保存科学部と共同研究）

（関連項目37頁参照）

西川杏太郎（修復技術部長）

樋口 清治（第二修復技術研究室長）

中里 寿克（第一修復技術研究室）

仙台市からの依頼に応じて行ったもので、この年発掘された伊達政宗墓所出土の副葬品（漆芸品を主とする）の現状を実査し、その保存方法および修復についての研究を実施した。これら副葬品のうち、文化財として価値の高い主要作品は、そのまゝ恒久的に地上で保存されることとなったが、90%を越す高湿な土中にあったものを、徐々に地上の通常気象に慣らした上で、修復を行うことが必要と判断され、保存科学部との共同研究の体勢をとり、実査検討がくり返され、地上保存の全作品を取りあえず、高湿状態に保ったアクリル樹脂透明ケース11箇に納めて、観察しつつ、気象調整を行うこととし、その一部は当研究所内に搬入されて、具体的な保存法の観察研究が行われている。この研究は来年度以降に継続される。

V 研究活動及び事業

広島市、平和記念館出陳原爆資料保存法の研究（保存科学部と共同研究）

（関連項目41頁参照）

西川杏太郎（修復技術部長）
樋口 清治（第二修復技術研究室長）
増田 勝彦（第二修復技術研究室）

同館からの依頼により、まず西川と登石保存科学部長が実査し、被爆資料の保存は古美術品保存の方法に準じて行われることが望ましく、そのためには、陳列室内の明るさ（現状窓際で1,000ルクス）を300ルクス程度に落すこと、陳列品特に被服類は劣化が著しいので、年中出したまゝにせず、陳列替えを行うこと、また保存のためのケースを新造することなどの助言をした。その後、樋口、増田が実査し、劣化した紙製品（すべて粗悪な洋紙）の修復について、ヨーロッパで歴史の長いラミネーション法が効果的と考えられ、来年度これについての具体的な研究を行うこととし、本年度は、ヨーロッパにおける研究文献の翻訳検討を行った。

出土遺物の保存処置法に関する研究（共同研究）

樋口清治（第二修復技術研究室長）
増田勝彦（第二修復技術研究室）
青木繁夫（第一修復技術研究室）

劣化が甚しく、断片化した出土金属製品、木製品、染織片などを、無色透明で非接着性のシリコンゲルに封入し、空気を遮断して保存を計ると同時に、博物館等でそのまゝ陳列出来る方法について研究を続けたが、本年はまず、金属製品の封入に好結果を得、実用化が可能となったため、受託研究（61頁参照）の松本市出土金銅天冠残片の処置に応用実施した。またこの方法は染織片の保存にも応用が可能と認められるので、これは引続いて来年度実施予定である。

特史・国宝高松塚古墳壁画保存対策への協力（共同研究）（関連項目40頁）

西川杏太郎（修復技術部長） 樋口清治（第二修復技術研究室長）
増田勝彦（第二修復技術研究室） 青木繁夫（第一修復技術研究室）

文化庁の要請により、保存科学部と共同して、高松塚古墳壁画等保存に関する各種の調査研究を行った。

- (1) 保存施設建設に伴い、振動などによって、天井漆喰が万一剝離した場合に備えて、それを受けるための保持台が造られたが、そのアクリル製の天板上にクッションとしてシリコンラバーを流すことを提案、それを実施した。（西川、

樋口、青木)

- (2) 高松塚古墳出土副葬金属製品に発生している錆の検討と一部除去を依頼され、分析(保存科学部 江本)の結果、銅錆の一部に、悪質な塩化銅に起因する塩基性塩化銅が、また、銀製品には塩化銀が検出されたため、それを除去、清掃し、今後乾燥状態で保管するためのアクリルケースを設計した。(青木)
- (3) 高松塚壁画の修理に先立ち、現状の損傷状況をどのように記録するかについて、現地調査を行い、記録用図面、記録要項案の準備を行った。(西川、増田)
- (4) 高松塚古墳保存対策協議会委員として、会議に出席した。(西川)

西川杏太郎 (修復技術部長・第一修復技術研究室長)

- 〔Ⅰ〕 経常的な主題として文化財(とくに彫刻)の伝統的製作技法および修復技術の調査研究を前年に引続いて行った。

これは作品がどういう材料を用いてどのように造られているかについての実査を混えた資料蒐集分析、過去の修理記録および実査データに基づく、修復技術の細部についての分析と、これに科学技術がどのように応用され得るかを究明するものである。所内での資料分析に加えて本年は、京都・禅定寺重文、木造十一面観音像、和歌山地蔵峯寺重文・石造地藏像、兵庫一乗寺重文・木造僧形像ほか7件の国宝、重文仏像の詳細実査(48.8~50.2)を行った。

- 〔Ⅱ〕 その他の調査と研究

福井県の依頼により特別史跡朝倉氏遺跡の指定地域内および周辺にある2000体をこえる小石仏の調査を行い、その保存修復の方法について指導助言を行った。

(49.9)

東大医学部標本室からの依頼で木造人頭解剖模型の調査を行った。(48.10~50.3)

これはヨーロッパ製であるか日本製であるかの判定を行うもので、詳細な技法研究および材質分析(保存科学部 見城)を行い、日本製と判定、しかも作品の内刳内部に寛政六年(1794)、鈴木常八作の墨書銘があることをボアスコープにより確認し得た。

中里 寿克 (第一修復技術研究室)

経常的な主題として、文化財(とくに漆工、木工芸品)の伝統的製作技法および修

復技術の調査研究を前年に引続いて行った。

〔I〕 漆芸・彩色の伝統的技法の調査及記録製作

神戸市立南蛮美術館において唐油画資料の「阿蘭陀油絵の方（元文六年写）」を複製した（10月）。文化庁美術工芸課の要請により京都平等院鳳凰堂板絵の下地剝落状態および技法について調査し（2月）、また前田育徳会蔵百工比照の文化庁による調査に専門家として協力した（2月）。春日神社蔵国宝蒔絵筆の修理に伴い、文化庁の要請で調査を行い、また修理に協力した（10.3）。

〔II〕 平安鎌倉時代漆芸技法の実証的研究

奈良時代の東京国立博物館蔵漆皮箱、大阪導明寺天満宮蔵玳瑁装牙櫛、大阪藤田美術館蔵乾漆伎楽面、菅田八幡宮蔵神輿、鞆淵八幡宮蔵神輿、奈良大和文華館蔵金銅螺鈿装説相箱、螺鈿玳瑁八角箱、浄明寺須弥壇、文化庁保管高麗経箱、本間美術館蔵蒔絵太刀箱、遠山美術館蔵蒔絵手箱、枚開神社蔵蒔絵手箱等の漆芸技法調査を行い、研究資料を整備集積することが出来た。

青木 繁夫（第一修復技術研究室）

〔I〕 出土遺物の保存修復研究

出土遺物の保存修復については、伝統的な技法による修理方法はない。そこで考古学上の遺物の研究調査をもとにして、その修復方法のあり方を研究するとともに、科学技術を応用した修復技術の開発を目指している。

本年は、東京国立博物館蔵の眉庇付冑、大刀、馬具など六点に対し、アクリル樹脂エマルジョン（プライマルMV-1）を減圧含浸して強化するなどの修復処置法を研究実施した。なお大きな欠失部については、従来FRPを使用して補足してきたが、今回は和紙にイソシアネート系樹脂を含浸させ、補足材として用いると共に硬質ウレタン樹脂を支持材として利用する方法などを試みて成果をあげることが出来た。

茂木 曙（第一修復技術研究員）

〔I〕 文化財の科学的修復技術の実施研究

経常的に、建造物、美術工芸品等に施された彩色の剝落止めのため合成樹脂を

用いる方法についての技術記録を行っているが、本年は、国立科学博物館保管太鼓時計の皮の表面に描かれた彩色剝落どめの実施（49.11～50.3）。千葉県立上総博物館出陳北斎筆絵馬の彩色剝落どめの実施（49. ）。東京浅草寺所蔵の大絵馬数十点の彩色剝落どめ（東京芸大、保存技術研究室実施）の技術指導（49.3～6）を行い、夫々、記録を整備集積した。

樋口 清治（第二修復研究室長）

文化財修復における合成樹脂の応用に関する研究を経常的に行っている。

〔Ⅰ〕 木造文化財修理における合成樹脂処置の研究

重文熊野神社長床修理に際し、人工木材の利用方法について指導し、また栃木県古河市の県指定中山住宅の腐朽、虫害で空洞化した松の敷梁を、集成材で補強し、人工木材とウレタン発泡体を用いて修復する方法を指導した。

また、来年度修理工事が予定されている滋賀県金剛輪寺三重塔について、合成樹脂処置について調査し、文化庁建造物課に報告した。

京都、美術院国宝修理所の木彫像修理における合成樹脂使用の状況について調査し、木造建造物において既に用いられている合成樹脂の仏像への応用のため、その使用方法を指導、助言した。

〔Ⅱ〕 彩色剝落どめに関する研究

水溶性アクリル樹脂に溶剤を添加し表面張力を低めたものが、彩色層によく滲透することを知り、皮革上の彩色剝落どめ（太鼓時計）に応用し効果があった。

愛知県鳳来山東照宮の重文建造物内部彩色剝落どめに、水溶性アクリル樹脂とアクリルエマルジョンを使用する方法を彩色修理技術者に指導したが、この方法は、合成樹脂使用時の彩色欠失部補彩に何ら障害のないことが確認され、従来、合成樹脂処置時の画面には、補彩がしにくいとの一部技術者の批判にこたえることが出来たのは収獲であった。

国宝平等院鳳凰堂壁画の剝落状態を、中里技官と共に現地調査し、その損傷状態の記録と、剝落どめ処置に関し美術工芸課に報告した。

〔Ⅲ〕 遺跡、遺構の保存に関する研究

沖縄県所在の史跡玉陵を現地調査し、石、漆喰製の文化財の修理に用いる合成

樹脂の選定について検討した。

土の遺構の崩壊防止に、新たなイソシアネート系の樹脂による処置法が有効と思われ、そのための調査、研究を開始した。

増田 勝彦（第二修復技術研究室）

絵画、書跡等の伝統的な装潢技法の科学的研究および、科学技術の装潢技術への応用を経常的な研究テーマとしている。

〔Ⅰ〕装潢に用いる和紙に関する資料収集と調査

本年は、文化庁美術工芸課によって行われた東京前田育徳会蔵百工比照の調査に助力し、その中の紙製品調査を担当した。また、吉野の美栖紙、宇陀紙、松江の雁皮紙、三隅の石州半紙の製作工程調査と資料蒐集を行った。

なお、このことは、別記特別研究によって特に促進された。

〔Ⅱ〕打紙、^{えい}瑩紙技法に関する研究

前年に引続いて、その資料蒐集を行ったが、本年は国外における打紙資料を加えることが出来た。

<ロ．特別研究>

「軸装等の保存および修復技術に関する科学的研究」は、本年度から三ヶ年継続。保存科学部と共同研究を行うものである。この研究は未開拓の分野であるので、基礎資料の収集と実験データの集積を重点的に行うこととし、まず伝統的な装潢技術の細部を実地見学した上で、三ヶ年にわたる研究テーマを下記のように設定した。

1. 伝統的な装潢技術の工程内容の記録（増田、西川）
2. 装潢用材料の蒐集整備と、材料に関する文献の蒐集（中里、増田、門倉、茂木）
3. 各材料の電子顕微鏡および光学顕微鏡による撮影記録（石川、門倉）と、強度試験（増田、三浦）X線回折法による測定（江本）
4. 接着した材料による記録、測定の実施（樋口、見城、石川、増田）
5. 糊の化学分析（デンプン糊と化学糊）（樋口、見城）
6. 紙の変質と絹の劣化の科学（江本、見城、新井、三浦）
7. 防虫、防黴剤の材質への影響（新井、森）

8. 保存箱の科学（三浦）
9. 軸装等の作品に対する適切な保存環境の設定（登石，石川，三浦）
10. 抄き嵌め技法の和紙への応用（増田）

以上のうち、装潢用紙材料の蒐集を大凡おわり、これらを試料とする顕微鏡撮影その他の諸分析実験が目下進行中である。保存箱については、実験用の箱二種類が用意され測定がはじめられた。ヨーロッパで、すでに行われている紙の修理に当っての抄き嵌めの技法は、小さな実験を行った結果、和紙にも応用し得る見通しが出来たので、小型の抄き嵌め機を設計製作し本格的実験がくり返されている。

＜ハ．受託研究＞

史跡加曾利貝塚（千葉市）の科学的保存の研究（保存科学部と共同研究）

（関連項目48頁参照）

樋口清治（第二修復技術研究室長）

青木繁夫（第一修復技術研究室）

地表層硬化のため新しい合成樹脂を用いることとし、そのテストを実施した。

国宝・重文日光社寺文化財保存の研究（保存科学部と共同研究 関連項目48頁参照）

西川杏太郎（修復技術部長）中里寿克（第一修復技術研究室）

研究対象は、主に日光山内にある指定建造物の表面彩色、塗装、金具類の保存に関するもので、本年は、各社殿、堂内等の彩色、唐油彩色、漆塗り部分の現状損傷状態の概念をつかむための実査を行った。

重文 名古屋城旧本丸御殿杉戸絵の保存処置の研究（名古屋市）

樋口清治（第二修復技術研究室長）

中里寿克、茂木 曜（第一修復技術研究室）

増田勝彦（第二修復技術研究室）

本年度、国庫補助事業により、この杉戸66面の彩色剝落どめが実施されたが、この処置に使用される合成樹脂の選択と工法の確認のため、その内の14面を対象に、国庫補助事業の一部を受託して処置法の研究を行った。

従来から杉戸絵の剝落どめは屢々行われているが、処置前処置後の精密な記録が欠けていたため、剝落どめ処置の有効性が確認し難い場合が多かった。今回は特に記録作成に重点がおかれ、また盛り上げ彩色の剝離に対する接着、剝落どめにより生ずる光沢防止の問題を中心に検討し、厚手に浮上った剝離部に、アセトンを追加して表面張力を下げた水溶性アクリル樹脂（バインダー-18）を含浸させて彩色層を軟かくし、次にアクリルエマルジョン（AC52）を含浸させて剝離部を

V 研究活動及び事業

接着する二段階の処置法を行って効果的であった。現地に残りの56面の修理を担当する技術者に、この方法を直ちに提供し、予定通り、無事修理工事を完了した。

長野県指定重文 桜ヶ丘古墳出土金銅天冠の保存処置の研究（松本市）

樋口清治（第二修復技術研究室長）
青木繁夫（第一修復技術研究室）

これは金銅の天冠であるが、現状材質の朽損、錆化が甚だしく、右半部は欠失し、他は十数片に折損している。しかし、錆の下には簡略な毛彫りの図文が認められ、また冠帯裏面には櫛の痕跡が残っているので、表裏が観察出来るような処置が要請されている。しかし各断片の接合部はうすい板金であるため、強度は全く期待できないので、まず、錆、泥を除去し、アクリルエマルション（MV-1）の減圧含浸で強化した上で、これら断片を復元的に整理して並べ、これを透明合成樹脂に埋設固定して外気を遮断し、保存に万全を期し、また、表裏から観察出来るような方法をとることとした。別のサンプルにより、年度初頭から実験を始め、その結果、アクリル樹脂製のケース内に、透明シリコン樹脂を流し、その中に埋没する工法により、保存処置を終った。この工法は、後で必要に応じて、容易に、樹脂中から取り出すことが出来る点が特色で、将来は他の遺物に対しても多用されるであろう。

古墳出土押出仏保存処置に関する研究（三重県立博物館保管）

樋口清治（第二修復技術研究室長）
中里寿克、青木繁夫、茂木 曜（第一修復技術研究室）

三重県津市内の古墳の床土に埋もれた状態で出土した押出仏で、銅板が腐朽粉化し、鍍金のみ、土に印象された仏像の表面に付著している状態のもの、裏返しに埋もれたものがあった。アクリル樹脂を厚くかけて補強した上で土から剝がしとり、最終的にエポキシ樹脂で銅板の裏を補強し、押出仏として観賞保存出来る状態にまとめるものである。昨年度から継続して実施し、本年度末に処置のすべてを完了した。

<ニ. 科学研究費>

「古美術品修復技法の資料蒐集とその基礎的研究」（一般研究C、西川杏太郎）

古美術品「国宝、重文指定」の修理記録の内、絵画彫刻の主要作例1,000件を選ん
で、そのコピイを作成、（本年度は彫刻600件を対象とする）これをもととした現時点

での実査確認を行い、伝統的な修復技術の研究を行い、制作技法史大系づけへの足懸かりを求めようとするもので、予定通り、資料蒐集および実査確認を終り、分類整理が行われた。（代表西川杏太郎、ほか修復技術部員計6名の共同研究）

C 主要研究業績 ① 著書 ② 論文 ③ 解説
④ 研究発表 ⑤ 講演・放送 ⑥ その他

西川杏太郎（修復技術部長）

- ① 興福寺北円堂と南円堂の諸像 岩波書店 49. 6
- ④ 伎楽面の技法と表現 —49年度 日本古美術夏期講座（東京国立博物館）
東京国立博物館 49. 8
- ⑤ 古美術品の保存と管理について 福岡県立九州歴史資料館 49. 6
- ⑤ 寄木造の彫刻 —西日本文化財指導者講習会（文化庁）
大津市日本生命大津ビル 49.10
- ⑤ 古美術品の取扱いと梱包 —美術品業務講習会 東京日通本社 50. 1
- ⑤ 美術工芸品の保存管理について
—49年度 文化財管理講習会（千葉県教育委員会） 千葉県自治会館 50. 1

中里 寿克（第一修復技術研究室）

- ② 漆地積層について 国宝東照宮陽明門、同左右袖塀修理工事報告書（共著）
49. 3
- ② 中心飾りの保存処置 重文新潟県議会旧議事堂修理工事報告書（共著）
49. 4
- ② 鹿島神宮蔵黒漆居木の修復処置 保存科学14号 50. 3
- ② 国宝唐招提寺金堂内部天井彩色保存処置（共著） 保存科学14号 50. 3
- ⑤ 古代漆芸技法と材料 神奈川県立工芸指導所鎌倉支所 50. 3

青木 繁夫（第一修復技術研究室）

- ② 長瀬西古墳出土短甲の保存修理と復原模造について（共著）
MUSEUM No. 285 49.12
- ② 岩手県堀野古墳出土蔵手刀の修復について 保存科学 14号 50. 3

茂 木 曙 (第一修復技術研究室)

- ② 国宝唐招提寺金堂内部天井彩色保存処置 (共著) 保存科学 14号 50. 3
 ② 国宝東福寺三門天井彩色剝落防止処置法の研究 保存科学 14号 50. 3

樋口 清治 (第二修復技術研究室長)

- ② 石材の表面の化学的処理方法の研究 特別史跡王塚古墳の保存
 一装飾古墳保存対策研究報告書一 福岡県教育委員会 50. 3
 ② 中心飾りの保存処置 重文 新潟県議会旧議事堂修理工事報告書 (共著)
 49. 3
 ③ 文化財修復における合成樹脂の応用 月刊「接着」№177 50. 1
 ④ 木造文化財の保存と修復における合成樹脂の応用と問題点
 文化財保存修復研究協議会 49. 9
 ⑤ 科学千一夜「古代保存術」 NHK (第1放送) 49. 4
 ⑤ 建築素材の化学的補修材料について
 49年度文化財建造物修理主任技術者講習会 49. 7
 ⑤ 文化財修復における合成樹脂の応用 [合成樹脂エマルジョンの新展開]
 高分子刊行会講習会 49.11

増田 勝彦 (第二修復技術研究室)

- ② 抱一筆洋犬図絵馬のクリーニング 保存科学 14号 50. 3

2. 事 業

(1) 出 版

A 美術研究

昭和7年1月創刊, 昭和49年3月 292号を発行。当研究所美術部の調査研究の成果を公表するための機関誌。主として所属研究員の執筆にかかる論文・研究資料・図版解説・美術関係文献の校刊等を掲載し、ときに所外研究者の寄稿を受けることもある。A4版, 各号本文42頁, 原色図版1, 単色図版8, 各年度6冊刊行。

昭和49年度(第293号～第298号)「美術研究」所載の論文等の題目は次のとおりである。

美術研究 293号 昭和49年 5月

<論文>

アスタナ出土の伏羲女媧図について (下) 上野 アキ

<図版解説>

来振寺五大尊像 有賀 祥隆

<研究資料>

近百年來中国画人資料 一 鶴田 武良

美術研究 294号 昭和49年 7月

<論文>

京都高田寺薬師如来像と藤原実方の歌 猪川 和子

<論文>

上杉家伝来鎧下着・着込み・頭巾等四領二個 下

一伝上杉謙信・上杉景勝所用服飾類調査報告 六一 神谷 榮子

<研究資料>

近百年來中国画人資料 二 鶴田 武良

美術研究 295号 昭和49年 7月

<論文>

山水表紙絵のある藤原経の一遺例 江 上 綏

<論文>

院政期の造像銘記をめぐる二、三の問題 永野 敬三郎

<論文>

江戸時代の洋風画とリュウベンス 坂 本 満

<図版解説>

石川孟高筆「獅子図」 陰里 鉄郎

美術研究 296号 昭和49年11月

<論文>

西明寺三重塔四天柱絵金剛界諸菩薩像 関口 正之

<論文>

中国仏像様式の南北 一再考一 松原 三郎

V 研究活動及び事業

美術研究 297号 昭和50年1月

<論文>

御物藤原行成筆敦康親王初親関係文書について

田村 悦子

<論文>

草土社の創立について

岡 畏三郎

<論文>

宇佐・天福寺奥院の仏像群

久野 健

<図版解説>

宇佐・天福寺の仏像

猪川 和子

美術研究 298号 昭和50年3月

<論文>

矢取地藏縁起について

宮 次男

<論文>

探幽を中心とする大徳寺玉林院障壁画 上

河野 元昭

<論文>

大分・長谷寺銅造観音菩薩立像

久野 健

B 明治美術基礎資料集

明治美術基礎資料集 内国勸業博覧会 (1, 2回編)
内国絵画共進会

美術部第二研究室では、昭和44年度より4ヶ年計画で、「日本近代美術の発達に関する明治前期・中期の基礎資料集成」なる題目のもとに特別の調査研究をすすめた。なお、これにより蒐集された基礎的資料の一部である内国勸業博覧会及び内国絵画共進会関係資料を復刻の形で一括編集し、これに各解説を附して一冊にまとめ出版した。B5版(横開き)

<資料> (リスマチック方式) 432頁

内国勸業博覧会 (1, 2回) 関係資料

内国絵画共進会 (全上) 全上

<解説> 40頁

内国勸業博覧会

沿革

工芸・彫刻

洋画

日本画

内国絵画共進会

西欧の美術展と博覧会

附一明治前期主要博覧会年表

岡 畏三郎

中村伝三郎

陰里 鉄郎

関 千代

関 千代

坂本 満

以上。

C 保存科学

保存科学 第14号 昭和50年3月

モナリザ展示に際しての温湿度調整

登石健三・三浦定俊

モナリザ展示に際しての照明について

登石健三・石川陸郎

文化財環境の塵埃に関する研究〔I〕

門倉 武夫

ゼオライトによる空気浄化

見城 敏子

書籍の生物劣化とその防除

新井英夫・森 八郎

葉香の防虫効果

森 八郎

奈良県高松塚古墳出土木棺の材種

江本 義数

国宝唐招提寺金堂内部天井彩色保存処置

受託研究報告第33号

茂木 曙・中里寿克・江本義理

抱一筆洋犬図絵馬のクリーニング

受託研究報告第34号

増田 勝彦

鹿島神宮蔵黒漆居木の修復処置

受託研究報告第35号

中里 寿克

岩手県堀野古墳出土蕨手刀の修復について

受託研究報告第36号

青木 繁夫

国宝東福寺三門天井彩色剝落防止処置法の研究

受託研究第37号

茂木 曙

D その他の出版物

美術部

支那古版画図録	(美術研究資料第1輯)	昭和7
吉備大臣入唐絵詞	(同 第2輯)	同 9
徽宗摹張萱搗練図	(同 第3輯)	同 10
鳳凰堂雲中供養仏	(同 第4輯)	同 11
桃山時代金碧障壁画	(同 第5輯)	同 12
富貴寺壁画	(同 第6輯)	同 13
印度及南部アジア美術資料	(同 第7輯)	同 14
光悦色紙帖	(同 第8輯)	同 14
菱田春草	(同 第9輯)	同 15
能恵法師絵詞	(同 第10輯)	同 16
宮素然筆明妃出塞図巻	(同 第11輯)	同 16
日本美術資料	第1輯	同 13
同	第2輯	同 14
同	第3輯	同 15
日本美術資料	第4輯	同 16
同	第5輯	同 17
近代日本美術資料	第1輯	同 23
同	第2輯	同 24
同	第3輯	同 26
墨跡資料集	第1輯	同 24
同	第2輯	同 24
同	第3輯	同 26
源氏物語絵巻		同 24
黒田清輝素描集		同 24
栄山寺八角堂		同 25
栄山寺八角堂の研究		同 26

法隆寺金堂建築及び壁画の文様研究		同	28
黒田清輝作品集		同	29
東洋美術文献目録	明治以降昭和10年まで	同	16
同	続編 昭和11年～同20年	同	23
東洋古美術文献目録	昭和21年～同25年	同	29
美術研究索引	第1号～第100号	同	16
美術研究総目録	第1号～第230号	同	40
高雄曼荼羅		同	41
東洋美術文献目録	明治以降昭和10年まで（再刊）	同	42
日本東洋古美術文献目録	昭和11年～同40年	同	44

ほかに科学研究費補助金（研究成果刊行費）の交付を受け、または本研究所の監修で刊行された図書は次のとおりである。

光学的方法による古美術品の研究

東京国立文化財研究所光学研究班編	吉川弘文館	昭和30
梁楷	美術研究所編 便利堂	同 32
醍醐寺五重塔の壁画	高田 修編 吉川弘文館	同 34
平安時代世俗画の研究	秋山光和著 同	同 39
近代日本美術の研究	隈元謙次郎著 大蔵省印刷局	昭和39
黒田清輝	同 日本経済新聞社	同 41

藤田法華經 芸能部 秋山光和 著 柳澤 亨 著 鈴木敏三	鹿島出版会	同 49
--	-------	------

標準日本舞踊譜		昭和35
音盤目録Ⅰ		同 40
芸能の科学 1	一 芸能資料集 1 一四世鶴屋南北作者年表	同 41
芸能の科学 2	一 芸能資料集 2 一 鮫の神楽台本集成	同 41
音盤目録Ⅱ		同 45
東大寺二月堂 観音悔過（お水取り）		

東京国立文化財研究所芸能部監修 ビクターレコード 同 47

芸能の科学 3	—芸能論考 I			
	東京国立文化財研究所芸能部編	平凡社	同	47
芸能の科学 4	—芸能資料集 3			
	東京国立文化財研究所芸能部編	平凡社	同	48
芸能の科学 5	—芸能論考 2			
	東京国立文化財研究所芸能部編	平凡社	同	49

保存科学部（受託研究報告）

重要文化財円成寺本堂内陣彩色剝落どめ他18件 昭和35～昭和42

(2) 公開学術講座

美術部

昭和49年10月26日 於 日本経済新聞社小ホール

中国絵画の近代百年

鶴田 武良

近代百年の前期（1840—1919）は太平天国の動乱により画家が上海に集中し、任頤、呉・昌碩に代表される鮮麗な色彩と大胆な構図を特色とする海上派が形成された。後期は主として日本・フランスに学んだ留学生によって西洋画法を取入れた新国画が生まれた。さらに1930年には、徐悲鴻らによって社会主義リアリズムによる美術運動が始まり、解放後の美術運動の基礎をつくった。

清朝の絵画

川上 涇

清朝画壇の著しい特色の1つは、文人画家の職業化である。その発生以来、文人画を支えていたのは地主層であるが、明の末期に農業経済力に対する商業経済力の優越が決定的となり、家郷を離れた文人画家が庇護者を求めて商業都市に集中する。乾隆期の楊州八怪はその代表的存在であり、その画風と生活は近現代に及ぶ。ただ他方、旧来の文人画家が永く余脈を保っていたことも看過し得ない。

芸能部

昭和50年1月8・9日（水・木） 18:00～20:40 於 朝日講堂

「法会と芸能・その技法」

法会のさまざま（諸宗派の寺ゴト）

横 道 萬里雄

法会は宗教行事として成立したものだが、その音楽・所作等の内容から見ると、表現芸術すなわち芸能の範囲に属する。それは、礼拝の対象である仏像が、造形芸術すなわち美術の作品として受けとることができるのと似ており、この観点から見た法会を、寺ゴトと呼ぶことにする。寺ゴトに用いる法要（一定の順序を持つ進行形式）の種類は数多いが、構成上、導入部・展開部・終結部にわかれ、展開部はさらに前置部・主部・後置部にわかれるなど、分析が可能であり、類型が認められる。この日は、その実例として、「^{りしゅざんまい}理趣三昧」と「^{じゅういちめんげか}十一面悔過」の二種を取り上げて解明し、さらに法要の分類、法要の諸要素の概観、声明の種類と様式等を、諸宗派の寺ゴトを通じて説き、寺ゴトにかくれた民俗学的側面や歴史の変遷についてもすこし触れた。なお講述には、スライドと録音テープを使用した。

春迎への行い 一民俗としての修二会一

三 隅 治 雄

「お水取りがすむと春が来る」と奈良の人々はいふ。祭りを一つの折り目として新しい季節が到来するという心意を、日本人は昔からそなえてきた。

農耕を主体とした生活を長らく営んできたわれわれの先祖は、収穫が終ると、衰えた人間の魂に活力を与え、生命の再誕をはかる祭事を行った。宮延の鎮魂祭などもその一つだが、民間でも、宿籠り、水浴み、湯立、舞踊などのきびしい行を積んで身心の浄化をはかり、それを果たすことで春を迎えた。ハルは清浄な魂の状態を意味する語であり、その状態に到達して、新年の豊穡・福運を祈願するのが春迎への祭りの本義であった。

こうした古来の民俗は、当然家々の年中行事や寺社の祭事にも反映し、東大寺修二会の中にも息づいている。

「修二会の組み立て」

佐 藤 道 子

東大寺修二会は、日本有数の伝統行事として年ごとに執り行われているが、悔過法要を中心として組み立てられた構成は大規模・多彩であり、かつ長期にわたる法会を細部に至るまで意を用いて変化させ、現存諸悔過会の中で独特な構成形式を示して

いる。

上記の諸特色を、悔過会を中心とした他寺の修正・修二会と比較することによって明らかにしようとした。

まず法会全般の構成についてその規模の大きさと多彩さを考察し、次に法会の中心部である悔過法要における懺悔・悔過の色彩の濃さを考察し、最後に悔過法要の中心部である「宝号」を一例として、細部における変化の巧みさを考察した。

(3) 開所記念行事

開所記念講演会 (49. 11. 9) 於 東京国立近代美術館講堂

日光東照宮陽明門における絵画

- | | |
|-----------------------|-------|
| 1. 天井板絵および袖壁唐油画の科学的調査 | 登石 健三 |
| 2. 狩野英信筆袖壁唐油画の美術史的調査 | 河野 元昭 |

天井板絵画及び袖壁唐油画の科学的調査 保存科学部長 登石健三

陽明門の袖側内壁には現在牡丹透彫の羽目が嵌っている。修理の為東側羽目を取り外したところ、奥に別の羽目が発見された。「結構書」によると、宝暦2年、「岩笹梅之立木錦花鳥三羽」の絵に改められたとあり、正に之に該当するものであった。

紫外線蛍光, 赤外線吸収, X線透視, X線蛍光, X線回折, 断面拡大などの調査方法で彩色を調べ、又基底の漆層についても詳細な調査を行った。その結果顔料の種類、絵具の塗り重ね、媒体としての油の他に膠も共存するらしいこと。元禄の牡丹唐草模様の一部が下層の漆上に残存すること。毎回の模様変えは漆の重ね塗りで行われていることなどが明らかとなった。

西側の牡丹羽目は既に修理済みであったが、X線透視の結果、文献通りの「大和松岩笹巢籠鶴」の全図柄が判明した。

狩野英信筆袖壁唐油画の美術史的調査 資料室 河野元昭

現在、陽明門の東西袖壁には牡丹図の浮彫が嵌込まれているが、昭和44年から始まった補修工事の進行中に、この下に狩野英信下絵の花鳥図唐油画があることが発見された。その筆者、制作時期は「宝暦之酉年十二月日光御室并脇堂社結構書」によって

判明する。東側壁面は紅梅に白鵬図で、江戸時代中期においても、桃山障壁画のすぐれた伝統が江戸狩野のなかに受け継がれていたことを示している。

(4) 会 議

保存科学部 修復技術部

第4回文化財保存修復研究協議会

昭和49年9月19日(木) 10:00—17:00

当研究所別館会議室にて

文化庁文化財鑑査官、建造物課長および担当官、美術工芸課長および担当官、記念物課担当官、東京国立博物館、東京芸術大学その他関係専門家の出席を得て「木造文化財の保存修復」をテーマとした研究発表および協議を行い、大きな成果を得た。

(報告者)

- | | |
|----------------------------------|------|
| 1. 木造文化財(彫刻)の保存修理について | 鷺塚泰光 |
| 2. 木造文化財(建造物)の保存修理について | 伊藤延男 |
| 3. 木造文化財の構造・材質の保存と修復における科学的方法と処置 | 関野 克 |
| 4. 木造文化財の保存と修復における合成樹脂の応用と問題点 | 樋口清治 |
| 5. 虫害と黴害 | 森 八郎 |
| 6. 木材から放出される化学的成分とその文化財におよぼす影響 | 見城敏子 |

(講演)

木材の耐久性と寸法安定化

東京農工大学教授 堀岡邦典

第5回文化財保存修復懇談会

昭和50年2月13日(木) 10:00~17:00

当研究所別館会議室にて

文化庁文化財保護部長、建造物課、美術工芸課、記念物課の各課長、担当官の出席を得て、昭和49年度調査研究概要、昭和50年度調査研究計画概要、国際保存センターに関する事項、国内外からの研修員、研修生の受入れなど報告を行い、昭和50年度特別研究、受託研究、保存科学シンポジウムおよび研究テーマ選択の方向、その他につ

き懇談し、意見交換を行った。

(5) 国際国内関係

美術部

国際関係としては、美術部の出版物、研究資料など各国との交換が盛に行われ、また外国の研究者で当研究所の研究員の指導をうけ、資料を利用して研究する者も多かった。

国内における活動については、学会関係として特に美術史学会、美学会などと接触を密にし、多くの寄与をなした。

芸能部

国際関係としては、各国大学・図書館・研究機関より、出版物の交換依頼を受けている。

また外国の研究者の指導・Society for Ethn musicology（アメリカ民族音楽学会）・国際音楽評議会の会員として寄与した。

国内における関係学会としては、東洋音楽学会・歌謡学会・日本民俗学会・音楽学会・日本教育音楽学会等に参加し、交流を行った。

保存科学部 修復技術部

国際関係

岩崎修復技術部長は、昭和49年4月20日から5月5日の間、国際保存センター、第22回理事会に出席した。

ユネスコ・アジア文化センターによるアジア地域文化財保存修復研修コースが、49年1月より始まり、引続いて、本年度6月まで、フィリピン派遣のノリエガ女史、タイ派遣のパイラタナ女史に対し、両部全員で、保存科学、修復技術の実地研修を行った。

また、この時期に重って（5～6月）ポーランド国立博物館、保存科学部長ツボレック博士が来日（ユネスコによる）両部において保存、修復についての意見交換を行った。

49年6月、東京で行われた日米文化教育会議に、日本側博物館関係専門委員として、登石、西川両部長が出席した。

また49年9月末、モンゴル共和国から建築修理関係専門家3名が来日（ユネスコによる）三週間にわたり、両部施設の見学と研修を行った。

49年9月6日より11月5日まで、江本化学研究室長は文部省在外研究員（短期）として、イギリス、ベルギー、オランダ、フランス、イタリアに出張した。その間美術館附属研究所等において、考古遺物の考古化学的研究に関して、材質分析、腐食防止処置フレスコ保存処置等の調査を行った。

50年2月、韓国ソウル国立博物館の修理技術者、李午意氏が来日、一ヶ年の予定で、当研究所に滞在、修復技術部において出土鉄製品の修復技術研修を行っている。（国際協力事業団のあっせんによる）

また3月、韓国文化財管理局、李治淳局長等3名が来所、両部の施設を視察、保存科学に関する組織等について意見交換を行った。

この他、南ベトナム考古学研究所、段文春氏（49.8）ボストン美術館 ウィリアム・ヤング氏（49.9）東京国立博物館で開催の中国人民共和國出土文物展のため来日中の工作員、三名（49.9）ギリシャ、アテネ国立博物館の修理技術者、ルーシーワイヤー女史（50.3）韓国国立博物館 崔館長（50.3）などが来所、両部の施設見学、あるいは意見交換、懇談を行った。

国内関係

文化庁主催、昭和49年度文化財建造物修理主任技術者講習会（49.7）において、登石保存科学部長（「保存科学 総論」）新井保存科学部生物研究室技官（「生物学的破壊因子とそれに対する化学的処理」）樋口修復技術部第二研究室長（「建築素材の化学的補修材料について」）が講師をつとめた。

文化庁西日本文化財指導者講習会（49.10）において西川修復技術部長（「寄木造の彫刻」）が講義した。

指定文化財展示取扱講習会において、登石保存科学部長（「保存と環境—収蔵室内の環境整備」）（49.8.12）新井技官（「防殺虫剤の知識」）（49.8）が講師をつとめた。

VI 研究施設・設備

1 蔵 書

美術部

東洋古美術 近代日本美術 西洋美術関係を主として、和漢(27,718) 洋書 (3,565)
を合わせて、31,283冊、ほかに美術関係雑誌、売立目録類及び拓本がある。

芸能部

雅楽・能・歌舞伎・文楽・邦楽・邦舞・民俗芸能・寄席芸その他わが国の伝統芸能
の研究に必要な図書3,874冊を所蔵する。演芸画報・歌舞伎新報・歌舞伎(第1次)・
テアトロ(第1次)・上方・民俗芸術・日本民俗・芸能復興・郷土研究・旅と伝説等
の雑誌、丸本・謄本等の台本も収集している。

保存科学部・修復技術部

古来の伝統的生産及び工芸技術書、技術史、または数少ないそれらの科学的究明を
試みたもの、修理報告書、調査報告書、及び化学・物理・生物学部門の保存科学に関
連ある和洋書を合わせて1,661冊を収集している。

昭和48・49年度の新蔵書数は次のとおりである。

区 分	美術部		芸能部		保存科学部 修復技術部		計
	和漢書	洋書	和漢書	洋書	和漢書	洋書	
昭和48年度	591冊	38冊	212冊	—	48冊	27冊	916 冊
昭和49年度	1,049 〃	20 〃	62 〃	—	43 〃	6 〃	1,180 〃

2 資 料

美術部

主として写真による美術研究資料であるが、その収集の目的は、内外の資料をあま
ねく収集・整理・保管して、その完璧な収集箇所として美術の研究に資することであ
る。この趣旨に基づいて設立当初から写真撮影による資料の作成をはじめ、印刷物を

整理してこれに加える等その収集につとめている。資料の内容は、日本美術・東洋美術・西洋美術および明治・大正美術に大別し、さらにこれを絵画・彫刻・工芸・建築等に分類整理している。その数は特別大型のものから小型のものまで、約13万余。写真資料のほか印譜・図版カード等がある。

23丁

芸 能 部

レコード・録音テープ・写真（8ミリ・16ミリシネを含む）等による芸能資料を多数そなえている。レコードには毎年各製作会社から発売される伝統芸能関係レコードのほか、昭和35年度文部省機関研究費によって購入した安原コレクションレコード5,450枚が含まれている。安原コレクションは、明治・大正・昭和三代にわたって刊行された各種邦楽レコードを網羅したもので、近代における邦楽の実態と変遷を知る上で貴重な資料である。録音テープ及び写真は、雅楽・能・歌舞伎・邦楽・邦舞・寺院行事・民俗芸能その他の伝統芸能を対象に記録してきたもので、奏演法の解析を中心とした写真・テープ、あるいは各種文書の記録写真等も含んでいる。種別による所蔵数は次のとおりである。

区 分	レコード	録音テープ	シネフィルム		写 真
			8 ㎜	16 ㎜	
昭和48年 まで累計	6,660 枚	1,740 本	168 本	3 本	多 数
昭和49年度	0	136 本	0	0	多 数
計	6,060 枚	1,876 本	168 本	3 本	多 数

3 機器・設備

美 術 部

光学的研究設備

光学的鑑識法を東洋古美術品の研究に応用することは当研究所において既に戦前から企画されていたが、昭和27年度にはそれまでの予備的研究成果と海外における研究設備を参考とし、科学研究費（機関研究）の交付を受けて本格的な設備を整えるにいたった。その後も技術的な進歩に即応して新規の装置を加え、美術史学の実証的研究

VI 研究施設・設備

に多大の貢献をしている。現在の主要設備を類別すると次のとおりである。

I X線透過撮影装置

- (1) 可搬式白色X線装置 1式
- (2) 可搬式ソフテックス装置(J型) 1式
- (3) 可搬式ソフテックス装置(新J型) 1式
- (4) 携帯用ソフテックス装置(E型) 1式

II 紫外線照射装置

- (1) 固定式照射装置 2台
- (2) 可搬式照射装置(フィリップス紫外線ランプ及び専用トランス) 2台
- (3) 携帯用紫外線検査器 1台

III ナトリウムランプ照射装置 2台

IV 赤外線暗視装置及び間接撮影装置

V 顕微鏡装置

- (1) 双眼実体顕微鏡及び写真撮影装置 1式
- (2) 新型双眼実体顕微鏡及びカラー顕微鏡写真同時撮影装置(可動支持台及び携帯用スタンド) 1式
- (3) 検査顕微鏡用側視鏡ユニット・モノフォト装置 1式

VI マイクロ写真関係設備

- (1) マイクロ写真撮影装置(付自動現像機, プリンター, 引伸機, 乾燥機等) 1式
- (2) ポータブル・マイクロ写真撮影装置 1式
- (3) マイクロ閲読機(ルーモ社製) 3台
- (4) リーダープリンター 1台

芸 能 部

各種伝統芸能の記録及び分析研究のための設備・機器を所有する。

I 設 備

録音室(遮音壁を備える) 調整室・視聴室(舞台を備える)・資料室・図書室

II 機 器

ビッチレコーダー	1 台
テープレコーダー	15 台
ビデオテープレコーダー	1 台
16mm撮影機	1 台
16mm映写機	1 台
8mm撮影機	4 台
8mm映写機	2 台
35mm写真機	5 台
35mmマイクロフィルム解読装置	1 台
16mmシネフィルム分析装置	1 台
ステレオ音声調整卓	1 台
スピーカー	4 台
スタジオ用照明器具	1 式

保存科学部・修復技術部

主な研究設備

装 置 名	説明, 目的, 性能等	数 量
走査型電子顕微鏡 (J S M-50 A 型)		1
恒温恒湿槽	0°~40°C 20~90%	1
サンシャインウェザーメーター	劣化促進試験機	1
真空凍結乾燥装置		1
紙耐揉強度試験機		1
光電分光光度計	自記	1
発光分光分析装置		1
蛍光X線分析装置	標準型及び非破壊用大型試料台つき	1
可搬式蛍光X線分析装置	現場可搬用	1
X線回折装置およびデバイ		
シェラーカメラ, ラウエカメラ	結晶同定	1

VI 研究施設・設備

X線発生装置	中間硬度	1
真空蒸着装置	表面薄膜形成	1
金属顕微鏡		1
生物顕微鏡		2
表面アラサ顕微鏡		1
万能顕微鏡		1
Co—60 γ 線線源	透視用3c及び0.2c	2
ガイガー・ミュラー計数装置	放射線測定	1
自記分光放射計	光の分光測定	1
ガスクロマトグラフ	ガス分析	
(水素イオン化検出器・熱伝導検出器・熱分解装置付)		1
回折格子自記赤外分光光度計		1
〃 赤外顕微鏡 他上記機械附属		1
引張試験機	5 kg	1
自動記録式示差熱天秤		1
炭素・水素・窒素分析計		1
減圧含浸装置		1
減圧殺虫装置		1
超低温槽	-50°C	1
冷却遠心機	-5°C~5°C	1
粒度分布測定装置		1
熱膨張計		1
レオメーター	粘性試験用	1
直読式動的粘弾性測定器		1
ライトガイドカラーメーター	色彩測定	1
工業用X線発生装置	200KV P、8 mA	1
万能試験機(島津, オートグラフ)	インストロン型, 10トン	1
回折格子分光照射器		1
赤外線TVカメラ装置一式		

超音波探傷装置一式

超音波探傷器	UFD-201型	1
超音波式コンクリート試験器		1
ク	厚み測定器	1

文化財の特殊性として、材質の劣化現象究明のための試験機類、非破壊的方法による材質調査のための分析機器類、及び微量試料の分析、調査などに用いる顕微鏡類などである。

4 黒田記念室

記念室は、本研究所の創立者故帝国美術院長子爵黒田清輝の功績を記念するために設けられたもので、黒田清輝の油絵・素描・写生帖等を陳列している。

収蔵されているものは、油絵125点・素描170点・スケッチブック等である。これらは創立当時主として黒田家から寄贈されたものであるが、その後、照子夫人、樺山愛輔、田中良氏等からの寄贈もふくまれており、随時陳列替を行なっている。毎週木曜日午後1時から4時まで一般に無料公開している。陳列品の主なものは、「知感情」・「花野」・「湖畔」・「赤髪の少女」・「もるる日影」・「温室花壇」他である。

黒田子爵記念室観覧規程

第1条 本研究所の黒田子爵記念室（以下単に「記念室」という。）は、この規程によって一般に公開する。

第2条 観覧は無料とする。

第3条 観覧者は、備付けの帳簿に現住所、氏名を記載し、掛員の指示を受けるものとする。

第4条 陳列品の模写又は写真撮影を希望する者は、予め書面により届出で許可を受けなければならない。

第5条 観覧者は、記念室内において左の事項を行ってはならない。

- 1 陳列品に手を触れること。

2 インク・墨汁等を使用すること。

3 飲食及び喫煙をなすこと。

第6条 観覧者がこの規程に違反し、又記念室公開の趣旨に反する行為があると認めるときは、退場を命ずることがある。

第7条 観覧の日時は毎週木曜日午後1時から同4時までとし、観覧を停止する日は左の通りとする。

祝 日

開所記念日(10月18日)

年末年始(12月25日から翌年1月6日まで)

夏期(7月21日から8月31日まで)

第8条 本研究所において必要があるときは、前条の日時を随時変更することがある。但しこの場合は予め掲示する。

5 観 覧 室

本研究所美術部の図書及び研究資料は主として研究者・学者・美術関係専攻の学生等に公開している。年間の観覧者数は、延1,000名程度である。

Ⅶ 職 員

1 現 職 員

昭和50年3月31日現在

所 属	官 職 名	氏 名	入所年月日
庶 務 課	所 長	関 野 克	昭 27. 4. 1
	課 長	幸 文 雄	49. 4. 1
	課 長 補 佐	五十嵐 春 雄	47. 4. 1
	庶 務 係	若 井 明	49. 8. 1
		松 本 多賀子	39. 6. 16
	文 部 事 務 官	斎 藤 靖 子	46. 4. 1
	事 務 補 佐 員	大 釜 一 也	37. 1. 16
	会 計 係	本 村 伝 一	34. 4. 1
		正 藤 隆 生	49. 8. 1
	文 部 事 務 官	高 谷 た ま	39. 4. 1
美 術 部	作 業 員	高 橋 久美子	48. 3. 22
	事 務 補 佐 員	大 塚 正 司	44. 1. 6
	作 業 補 作 員	岡 畏三郎	20. 5. 55
	部 長	上 野 ア キ	17. 11. 3
		関 千 代	18. 12. 15
	主 任 研 究 官	柳 沢 孝	21. 9. 30
	〃	田 村 悦 子	22. 6. 16
	〃	宮 次 男	30. 9. 1
	〃	猪 川 和 子	22. 6. 27
	〃	田 実 栄 子	23. 3. 31
第 一 研 究 室	室 長	久 野 健	20. 5. 31
第 二 研 究 室	文 部 技 官	関 口 正 之	42. 2. 1
	室 長	中 村 伝三郎	22. 10. 1

Ⅶ 職 員

資 料 室	文 部 技 官	坂 本 満	33.10. 1
	〃	陰 里 鉄 郎	41. 4. 1
	室 長	川 上 涇	21. 2.28
	文 部 技 官	永 雄 ミ エ	23. 9. 3
	〃	江 上 綏	38. 5. 1
	〃	鶴 田 武 良	47.12. 1
	〃	河 野 元 昭	46.10. 1
	専 門 職 員	橋 本 弘 次	21. 6.15
	〃	市 川 和 正	30. 7. 1
	文 部 技 官	野久保 昌 良	36.10. 1
芸 能 部 演 劇 研 究 室	部 長	横 道 萬里雄	28. 3.16
	室長事務取扱	横 道 萬里雄	
	文 部 技 官	中 村 茂 子	39. 7. 1
	事 務 補 佐 員	大 田 有喜子	49. 4. 4
	音 樂 舞 踊 研 究 室	柿 本 吾 郎	49. 4. 1
	室 長	佐 藤 道 子	30. 5.16
	文 部 技 官	松 本 雅	44. 9. 1
	調 査 研 究 員 (非)	三 隅 治 雄	27.10. 1
	室 長	仲 井 幸二郎	41. 5. 1
	調 査 研 究 員 (非)	登 石 健 三	27.10. 1
保 存 科 学 部 化 学 研 究 室	部 長	江 本 義 理	27. 4. 1
	室 長	門 倉 武 夫	32. 5. 1
	文 部 技 官	見 城 敏 子	29. 9. 1
	〃	登 石 健 三	
	室長事務取扱	石 川 陸 郎	32. 4.25
	文 部 技 官	三 浦 定 俊	48. 8. 1
	〃	登 石 健 三	
	室長事務取扱	新 井 英 夫	45. 9. 1
	文 部 技 官		
物 理 研 究 室			
生 物 研 究 室			

修復技術部 第一修復技術研究室	調査研究員(非)	森 八 郎	48. 4. 1
	部 長	西 川 杏太郎	48. 7. 1
	室長事務取扱	西 川 杏太郎	
	文 部 技 官	中 里 寿 克	39. 1. 1
	〃	青 木 繁 夫	49. 7. 1
	専 門 職 員	茂 木 曙	29. 7. 1
第二修復技術研究室	室 長	樋 口 清 治	37.11. 1
	文 部 技 官	増 田 勝 彦	48. 8. 1

2 旧 職 員

(1) 昭和49年度

所 属	官 職 名	氏 名	在 職 期 間	備 考
庶務課 〃 〃	課 長	鬼 山 光 義	45. 4. 1~49. 4. 1	退 職
	庶務係長	羽 田 吉 一	28. 3.16~49. 7. 9	死 亡
	事務補佐員	山 下 房 子	48. 7.12~50. 3.30	退 職
芸能部 〃 修復技術部	部 長	浦 山 政 雄	27.10. 1~49. 4. 1	退 職
	演劇研究室 調査研究員	宮 本 瑞 夫	41. 5. 1~50. 3.31	退 職
	部 長	岩 崎 友 吉	27. 4. 1~49. 5.31	退 職

(2) 昭和25年度~昭和49年度(25年8月~49年度末)

所 属	官 職 名	氏 名	在 職 期 間
庶務課(室)	所 長 事 務 代 理	矢 代 幸 雄	27. 4 ~ 28.11
	所 長	田 中 一 松	27.10 ~ 40. 3
	雇 (事務)	山 田 秀 昭	25.10 ~ 28. 4
	庁 務 補 助 員	長 沢 ア イ	27. 5 ~ 29. 5

Ⅶ 職 員

美術部	雑	仕	吉野茂七	21.11 ~ 29.12
	◇		諸星ハル	20.5 ~ 29.12
	臨時筆生		藤森園子	29.6 ~ 31.11
	庶務係長		加藤輝之	27.10 ~ 34.11
	◇		安岡潤	34.11 ~ 36.10
	文部事務官		長沢朝夫	29.5 ~ 36.11
	警務員		鶴田豊次郎	29.4 ~ 38.3
	庶務係長		鬼山光義	36.10 ~ 38.4
	事務員		長沢道子	31.12 ~ 39.7
	課長		小島忠二	26.5 ~ 40.3
	作業員		糟谷愛子	37.2 ~ 40.12
	事務員		中村圭子	35.11 ~ 40.1
	警務員		鎌田幸四郎	29.1 ~ 41.2
	課長補佐		守谷安知	38.4 ~ 41.6
	文部事務官		本間春次	40.4 ~ 42.3
	課長		野島弥三郎	41.4 ~ 44.3
	事務補佐員		横川千代子	43.4 ~ 44.3
	課長		岩田守夫	44.4 ~ 45.4
	技能補佐員		三次ヨシ	45.4 ~ 46.3
	警務員		友田薫	41.2 ~ 47.3
	課長補佐		音川啓太郎	41.6 ~ 47.4
	事務補佐員		織田裕子	45.4 ~ 47.8
	◇		高橋雄二	43.10 ~ 48.3
	課長		鬼山光義	45.4 ~ 49.4
	庶務係長		羽田吉一	28.3 ~ 49.7
	警務補佐員		山下房子	48.7 ~ 50.3
	研究所文部技官		島田修二郎	23.7 ~ 26.11
	第一研究室文部技官		白畑よし	5.6 ~ 27.8

部	長	松 本 栄 一	24. 8 ~ 27. 10
第二研究室文部技官		河 北 倫 明	18. 1 ~ 27. 10
第一研究室技術員		鈴 木 友 也	28. 1 ~ 28. 2
資料室文部技官		持 丸 一 夫	22. 6 ~ 29. 3
資料室技術員		山 田 桂 二	29. 2 ~ 30. 2
第一研究室文部技官		大 串 純 夫	14. 4 ~ 30. 7
第二研究室技術員		池 田 涼 子	22. 6 ~ 33. 6
文 部 技 官 (併任)		新 規 矩 男	22. 10 ~ 34. 3
部	長	福 山 敏 男	23. 5 ~ 34. 4
資料室文部技官		小 沢 健 志	26. 4 ~ 36. 3
第一研究室長		熊 谷 宣 夫	19. 10 ~ 37. 3
部	長	田 沢 坦	34. 6 ~ 37. 4
第一研究室長		伊 東 卓 治	22. 5 ~ 38. 3
文 部 技 官 (併任)		米 沢 嘉 圃	27. 10 ~ 40. 5
〃		吉 川 逸 治	22. 10 ~ 40. 5
〃		河 北 倫 明	28. 4 ~ 40. 5
第一研究室長		隈 元 謙 次郎	7. 6 ~ 41. 3
第二研究室長		秋 山 光 和	21. 10 ~ 42. 2
部	長	高 田 修	27. 12 ~ 44. 3
資料室文部技官		辻 惟 雄	37. 6 ~ 46. 5
第一研究室文部技官		戸 田 禎 佑	37. 6 ~ 46. 6
部	長	中 川 千 咲	9. 4 ~ 47. 3
第一研究室文部技官(併任)		秋 山 光 和	42. 2 ~ 49. 3
部	長 (併任)	加 藤 成 之	27. 10 ~ 32. 6
庁 務 補 助 員		新 井 範 子	27. 10 ~ 34. 10
部	長 (併任)	下 総 覚 三	33. 1 ~ 37. 7
演劇研究室文部技官		玉 木 清 子	34. 9 ~ 39. 6
演劇研究室研究員 (非)		戸 部 銀 作	27. 10 ~ 41. 3

Ⅶ 職 員

保存科学部	音楽舞蹈研究室研究員(非)	岸 辺 成 雄	27. 10 ~ 41. 3
	郷土芸能研究室研究員(非)	池 田 弥三郎	27. 10 ~ 41. 3
	演劇研究室研究員 (非)	石 田 百合子	40. 4 ~ 41. 3
	〃	阿 部 順 子	40. 8 ~ 43. 9
	音楽舞蹈研究室研究員(非)	山 路 興 造	42. 4 ~ 44. 3
	部 長	浦 山 政 雄	27. 10 ~ 49. 4
	演劇研究室研究員 (非)	宮 本 瑞 夫	41. 5 ~ 50. 3
	臨 時 筆 生	赤 岡 恒 子	26. 4 ~ 29. 7
	庁 務 補 助 員	橋 本 義 雄	28. 10 ~ 32. 7
	修 理 技 術 研 究 室 長	毛 利 登	37. 10 ~ 38. 4
修復技術部	物理研究室研究員 (非)	呉 屋 充 庸	29. 4 ~ 40. 3
	修 理 技 術 研 究 室 長	立 田 三 朗	37. 10 ~ 45. 1
	部 長	岩 崎 友 吉	27. 4 ~ 49. 5

注 (1) (2)の所属, 官職は, 転退時を示す。

VIII 関 係 法 規

◎文部省設置法（昭和24年法律 第146号
最終改正 昭和48年 9月29日 103号）（抄）

第3節 附属機関

（附属機関）

第36条 第43条〔審議会〕に規定するもののほか、文化庁に、次の機関を置く。

国立博物館

国立近代美術館

国立西洋美術館

国立国語研究所

国立文化財研究所

日本芸術院

2 前項の機関（日本芸術院を除く。）の長は、文化庁長官の申出により、文部大臣が任命する。

（国立文化財研究所）

第41条 国立文化財研究所は、文化財に関する調査研究、資料の作成及びその公表を行なう機関とする。

2 国立文化財研究所の名称及び位置は、次のとおりとする。

名 称	位 置
東京国立文化財研究所	東 京 都
奈良国立文化財研究所	奈 良 市

3 国立文化財研究所には、支所を置くことができる。

4 国立文化財研究所及びその支所の内部組織は、文部省令で定める。

◎文部省設置法施行規則（昭和28年 1月13日 文部省令第2号）
最終改正 昭和48年 9月29日 第25号）（抄）

第5章 文化庁の附属機関

第4節 国立文化財研究所

第1款 東京国立文化財研究所

(所長)

第117条 東京国立文化財研究所に、所長を置く。

2 所長は、所務を掌理する。

(内部組織)

第118条 東京国立文化財研究所に、庶務課及び次の4部を置く。

- 一 美術部
- 二 芸能部
- 三 保存科学部
- 四 修復技術部

(庶務課の事務)

第119条 庶務課においては、次の事務をつかさどる。

- 一 職員の人事に関する事務を処理すること。
- 二 職員の福利厚生に関する事務を処理すること。
- 三 公文書類の接受及び公印の管守その他庶務に関すること。
- 四 経費及び収入の予算、決算その他会計に関する事務を処理すること。
- 五 行政財産及び物品の管理に関する事務を処理すること。
- 六 庁内の取締りに関すること。
- 七 前各号に掲げるもののほか、他の所掌に属しない事務を処理すること。

(美術部の3室及び事務)

第120条 美術部に、第一研究室、第二研究室及び資料室を置く。

- 2 第一研究室においては、わが国の上代、中世及び近世の美術並びに東洋美術に関する調査研究を行ない、及びその結果の公表を行なう。
- 3 第二研究室においては、わが国の近代及び現代の美術並びに西洋美術に関する調査研究を行ない、及びその結果の公表を行なうとともに黒田記念室に関する事務をつかさどる。
- 4 資料室においては、美術の研究に関する資料の作成、収集、整理、保管、公表及び閲覧並びに光学的方法による美術の研究を行なう。

(芸能部の3室及び事務)

第121条 芸能部に、演劇研究室、音楽舞踊研究室及び郷土芸能研究室を置く。

- 2 演劇研究室においては、演劇及びその保存に関する調査研究を行ない、並びにその結果の公表を行なう。
- 3 音楽舞踊研究室においては、音楽及び舞踊並びにこれらの保存に関する調査研究を行ない、並びにその結果の公表を行なう。
- 4 郷土芸能研究室においては、郷土芸能及びその保存に関する調査研究を行ない、並びにその結果の公表を行なう。

(保存科学部の3室及び事務)

第122条 保存科学部に、化学研究室、物理研究室、及び生物研究室を置く。

- 2 化学研究室においては、文化財及びその保存に関する化学的調査研究(分析化学的調査研究を含む。)を行ない、並びにその結果の公表を行なう。
- 3 物理研究室においては、文化財及びその保存に関する物理学的調査研究を行ない、並びにその結果の公表を行なう。
- 4 生物研究室においては、文化財及びその保存に関する生物学的調査研究を行ない、並びにその結果の公表を行なう。

(修復技術部の2室及び事務)

第122条の2 修復技術部に、第一修復技術研究室及び第二修復技術研究室を置く。

- 2 第一修復技術研究室においては、木、漆その他次項の材料以外のものを材料とする文化財の修復に関する科学的、技術的調査研究を行ない、及びその結果の公表を行なう。
- 3 第二修復技術研究室においては、紙、布又は革を材料とする文化財の修復に関する科学的、技術的調査研究を行ない、及びその結果の公表を行なう。

◎文部省定員細則 (昭和44年5月21日文部省訓令第12号) (抄)
(改正 昭和48年9月29日第28号)

文部省定員規則(昭和44年文部省令第12号)第2項の規定に基づき、文部省定員細則を次のように定める。

文部省定員細則

- 1 文部省に係る行政機関職員定員令(昭和44年政令第121号)第1条に規定する定

Ⅷ 関係法規

員（以下「定員令第1条定員」という。）及び沖縄の復帰に伴う行政機関の職員の定員に関する法律の適用の特別措置に関する政令（昭和47年政令第191号）第1条に規定する定員（以下「特措法政令定員」という。）別の本省の各内部部局，各国立学校，各所轄機関及び各附属機関別の定員並びに文化庁の各内部部局及び各附属機関別の定員は，次の表のとおりとする。

文 化 庁

区 分		定員令第1条定員	特措法政令定員	計
附属機関	国立文化財研究所	140人 各国立文化財研究所を通じての定員とする。		140人

- 2 各国立大学，各国立高等専門学校，各国立高等学校，各国立青年の家，各国立博物館，各国立近代美術館及び各国立文化財研究所の定員は，国立学校及び本省の附属機関にあっては文部大臣，文化庁の附属機関にあっては文化庁長官が，それぞれ，前項に定める当該国立学校又は附属機関別の定員の範囲内において，別に定める。

附 則（昭和48年9月29日文部省訓令第28号）

- 1 この訓令は，公布の日から施行する。

◎国立博物館等の機関別の定員について（昭和44年5月26日文化庁長官裁定）（抄）
（昭和49年4月11日改正）

文部省定員細則（昭和44年文部省訓令第12号）第2項の規定に基づき，各国立博物館，各国立近代美術館および各国立文化財研究所の機関別の定員を次のとおり定める。

機 関	定 員
東京国立文化財研究所	48人

附 則

この規定は，昭和49年4月1日から適用する。

教育公務員特例法施行令（昭和44年5月26日 政令第6号
最終改正 昭和47年5月4日 第163号）（抄）

（教育公務員以外の者）

第2条 省略

第3条 省略

第3条の2 文部省設置法（昭和24年法律 第146号）第14条〔国立の学校等〕及び第36条第1項〔附属機関〕に掲げる機関（日本芸術院を除く。）並びに国立学校設置法（昭和24年法律第150号）第3章の2〔高エネルギー物理学研究所及び国文学研究資料館〕に規定する機関の長及びその職員のうちもっぱら研究又は教育に従事する者並びに国立養護教諭養成所設置法（昭和40年法律第16号）による国立養護教諭養成所の所長、教授、助教授及び助手については、法第4条〔採用及び昇任の方法〕、第7条〔休職の期間〕、第11条〔服務〕、第12条〔勤務成績の評定〕、第19条〔研修〕、第20条〔研修の機会〕及び第21条〔兼職及び他の事業等の従事〕中国立大学の学長及び教員に関する部分の規定を準用する。この場合において、これらの規定中「大学管理機関」とあるのは次の各号の区別に従って読み替え、これらの機関の長及びその職員をそれぞれ学長及び教員に準ずる者としてこれらの規定を準用するものとする。

- 一 法第4条第1項〔採用及び昇任の選考〕については、国立学校設置法第3章の2に規定する機関の長及びその職員にあっては「文部省令で定めるところにより任命権者」、その他の機関の長及びその職員にあっては「任命権者」
- 二 法第4条第2項〔採用及び昇任の選考の基準〕 第7条、第11条及び第12条については、「任命権者」

◎東京国立文化財研究所部室長会議運営規則

（昭和45年1月23日所長裁定）

第1条 東京国立文化財研究所部室長会議（以下「部室長会議」という。）の運営については、この規則の定めるところによる。

第2条 部室長会議は、本研究所の重要事項について協議し、各部課相互の連絡をは

Ⅷ 関係法規

かることを目的とする。

第3条 部室長会議は、次の各号にかかげる職員をもって組織する。

- 一 所 長
- 二 各部長
- 三 各室長
- 四 課 長

第4条 部室長会議は所長が招集し、その議長となる。

- 2 所長に事故あるときは、会議出席者の中から互選により議長を定める。
- 3 所長は必要と認める職員を会議に出席させることができる。

第5条 部室長会議は原則として毎月1回開催する。ただし緊急を要する場合は、随時開催することができる。

第6条 部室長会議に関する事務は、庶務課がこれにあたる。

第7条 この規則に定めるものの他、会議の運営に関して必要な事項は、別に定める。

附 則

この規則は、昭和45年1月23日から施行する。

◎東京国立文化財研究所受託研究取扱規程

(昭和46年3月15日所長裁定)
(昭和47年10月2日改正)

(趣 旨)

- 第1条 この規程は、東京国立文化財研究所（以下「研究所」という。）における受託研究（外部からの委託を受けて公務として行なう研究で、これに要する経費を委託者が負担するものをいう。）の取扱いに関し必要な事項を定めるものとする。
- 2 受託研究は、研究所の文化財に関する調査研究上有意識であり、かつ本来の調査研究に支障がなく、当該年度の予算額の範囲内において行なうものとする。

(受託の条件)

第2条 受託研究の受入れ条件は、次の各号に掲げるとおりとする。

- (1) 受託研究は、受託者が一方的に中止することはできないこと。
- (2) 受託研究の結果、工業所有権等の権利が生じた場合には、当該権利を無償で使

用させ、または譲与することはできないこと。

- (3) 受託研究に要する経費により取得した設備等は、返還しないこと。
- (4) やむを得ない事由により受託研究を中止し、またはその期間を延長する場合においても、研究所は、その責を負わず、また、原則として受託研究に要する経費を委託者に返還しないこと。ただし、特に必要があると認めた場合は、不用となった経費の額の範囲内において、その全部または一部を返還することがあること。
- (5) 委託者は、受託研究に要する経費を、当該研究の開始前に納付すること。
- 2 所長は、前項に定めるもののほか、必要と認める条件を別に定めることができる。
- 3 委託者が国の機関、政府関係機関または、地方公共団体である場合は、第1項第3号および第5号の条件は、これを付さないことができる。
- 4 委託者は、必要がある場合は、所長の承認を得て、その委託にかかる研究を協力して行なうことができる。

(決定の方法)

第3条 所長は、当該研究を担当する職員、当該職員の所属する室および部の長の意見を徴したうえ受託研究の受入れを決定する。

(受託の申込等)

第4条 受託研究の申込みをしようとする者は、別紙様式による受託研究申込書を所長に提出しなければならない。

- 2 所長は、受託研究の受入れを決定したときは、その旨委託者および研究所契約担当職員に通知するものとする。
- 3 前項の通知に基づき契約担当職員は、契約を締結した旨を、所長に通知するものとする。

(研究の中止等)

第5条 受託研究を担当する職員は、当該研究を中止し、または、その期間を延長する必要があると認めたときは、ただちに所属の室 および 部の長を経て 所長に報告し、その指示を受けるものとする。

- 2 所長は、受託研究の遂行上やむを得ない理由があると認めたときは、これを中止し、または、その期間を延長することを決定し、その旨委託者および契約担当職員に通知するものとする。

Ⅷ 関 係 法 規

(研究結果の報告等)

第6条 受託研究を担当する職員は、当該研究が完了したときは、その結果を所属の室および部の長を経て所長に報告するものとする。

2 委託者に対する受託研究の結果の報告は、当該研究を担当した職員が前項の報告後行なうものとする。

3 受託研究の成果を公表するときは、所長の承認を得て当該研究を担当した職員が行なうものとする。

附 則

この規程は、昭和46年4月1日から施行する。

この裁定は、昭和47年10月2日から施行する。

〔別紙様式〕

受 託 研 究 申 込 書

昭和 年 月 日

東京国立文化財研究所長 殿

住 所

氏 名 (名称・代表者)

印

東京国立文化財研究所受託研究取扱規程第4条第1項の規定により、下記のとおり受託研究の申し込みをします。

記

1. 研究題目
2. 研究目的および内容
3. 研究に要する経費
4. 研究用資材、器具等の提供
5. その他

昭和50年 8 月20日 印刷

非売品

昭和50年 8 月28日 発行

発行者 東京国立文化財研究所

代表者 関 野 克

東京都台東区 上野公園 13-27